

中部大学民族資料博物館

年報 9号

2019

ANNUAL REPORT Volume 9

2019

Museum of Ethnology Art
Chubu University

年 報

9号

ANNUAL REPORT

Volume 9

令和 1 年

2019

中部大学民族資料博物館

Museum of Ethnology Art

Chubu University

Annual Report of Museum of Ethnology Art
Vol. 9, 2019

Edited and published by
Museum of Ethnology Art, Chubu University
Matsumoto-cho 1200, 487-8501 Kasugai-shi,
Aichi, Japan

Printed by
Fuji Printing Industry Co.,Ltd

©2019
Chubu University

目次

巻頭言 荒屋鋪 透	5
1. 博物館活動報告	
展示（常設展・企画展）	8
講演	20
講座	22
実績	
1. 開館日数・入場者数	24
2. 団体見学	26
3. 出版	27
4. 広報	30
5. 資料収集・保存	31
6. 教育・普及	32
7. 調査・研究業績	35
活動報告 大学の歴史資料の保存と活用を通じて考える「大学像」 ～学校法人中部大学創立 80 周年記念催事の記録から 原田 千夏子	37
8. 出張業務	46
9. 会議	46
2. 組織・施設	
組織	
1. 職員	48
2. 運営委員	48
3. 外部専門委員	48
4. 諸規程・要綱	49
5. 関係法規	55
施設	58
3. 研究調査・論文	
音楽と庭園を「展示」するデフォルト ——栃木県立美術館「山田耕筰と美術」展とベルリン「地上の悦びの庭」展 前田 富士男	60

Contents

Preface

Toru ARAYASHIKI	5
-----------------------	---

1. Report: Events

Exhibitions: Collections / Special Exhibition	8
-----------------------------------------------------	---

Lectures	20
----------------	----

Courses	22
---------------	----

Performance

1. Opening days / Visitor statistics	24
--------------------------------------------	----

2. Group tours	26
----------------------	----

3. Publication	27
----------------------	----

4. Public Relation	30
--------------------------	----

5. Material collection / Preservation	31
---------------------------------------------	----

6. Educational promotion activity	32
-----------------------------------------	----

7. Research activity	35
----------------------------	----

Chikako HARADA, Research report, “University image” to think th-rough preservation and utilization of university historical materials, based on the record of the 80 th anniversary commemorative event of Chubu University	37
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----

8. Business trip	46
------------------------	----

9. Meeting	46
------------------	----

2. Organization and Management / Facility

Organization and Management

1. Museum staff	48
-----------------------	----

2. Steering committee	48
-----------------------------	----

3. External expert adviser	48
----------------------------------	----

4. Regulations	49
----------------------	----

5. National Laws	55
------------------------	----

Facility	58
----------------	----

3. Article and Research Report

article

Fujio MAEDA, Changing the default values of “exhibition” for music and garden: <i>Koscak Yamada and Art</i> in Tochigi Prefectural Museum of Fine Arts, Utsunomiya & <i>Garden of Earthly Delights</i> in Gropius Bau, Berlin	60
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----

巻頭言

荒屋鋪 透

2019年度の中部大学民族資料博物館の開館日数は186日、入館者の合計は4,679名であった。これに秋季関連講演、通年の特別講座の参加者を加え、総計5,207名の学生と市民が博物館の展覧会と催しを訪れている。入館者の内訳では、高校の大学施設見学の受け入れ件数が47件、見学者の総数は1,954名である。約5,000名の利用者の内、約2,000名は高校生となっている訳である。また主な団体見学、交流ではICOM（国際博物館会議）、国立台湾大学、江南市赤十字奉仕団、春日井市教育委員会、JST（国立研究開発法人科学技術振興機構）、さくらサイエンスプラン、嘉興学院（中国）、JICA（国際協力機構）、国際園芸アカデミー、春日井市北城小学校ほか多くの大学、教育機関、企業関係の方々を訪れた。

民族資料博物館の展覧会事業では、中部大学平左工門カメラ同好会との共催で「伊藤平左工門のカメラコレクション展『クラシックカメラで撮った写真』展」を2019年9月に開催した。中部大学の所蔵する故伊藤平左工門名誉教授のカメラコレクションを現在、民族資料博物館が管理・保管しているため、上記の同好会と共にコレクションの紹介を行っている。

一般市民を対象にした「特別講座＜古典絵画＞」は2019年4月から2020年1月に、講師の下川辰彦先生（画家、日本美術院特待、民族資料博物館外部専門委員）を迎え、通年26回の講座を実施した。課題は金屏風の小下図制作であった。受講生は金地に彩色するという、難しい課題にとりくみ、美しい空間表現を学んでいる。

本年2019年11月、学校法人中部大学は創立80周年の記念式典を、春日井キャンパスで行った。民族資料博物館は2019年度の秋季企画展「中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久」展（博物館シルクロード室）を、その「創立80周年記念」展覧会として準備していた。岡田憲久（おかだ・のりひさ）先生は作庭家であり、名古屋造形大学で教鞭をとられ中部大学でも学生を指導されたが、中部大学春日井キャンパスの3つの庭、「茶室の工法庵と書院の洞雲亭の庭」、2号館中庭の「みなもの庭」、25号館中庭の「花鏡の庭」を作庭された（1991～2003年作庭）。この記念展のため2018年から修復工事がなされ、2019年10月から翌年1月にかけての展覧会の会期中、岡田先生の解説による「庭園見学会」を4回実施、2020年1月の見学会には80名の参加者があった。この展覧会開催前の2019年6月、岡田先生と民族資料博物館の運営委員である稲川直樹教授（工学部建築学科）、上野薫准教授（応用生物学部環境生物科学科）、前田富士男客員教授（民族資料博物館）と稿者による対談を行い、博物館刊行の冊子「講演記録2019」に記録した。展覧会開催後の2019年10月には、岡田先生による記念講演会「中部大学 3つの庭に込めた思い」を開催、前述の「講演記録2019」に掲載した。

また同じ「創立80周年記念」として「中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今」展（博物館多目的室）を同時開催した。この企画は「中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久」展の一環であり、中部大学の歴史を春日井キャンパスの建設、整備の推移から辿るもので、大学の創立者、三浦幸平先生の原稿、また貴重な図面、写真など多数を展示した。この創立80周年記念の秋季企画展覧会に伴い、岡田先生の作庭した中部大学春日井キャンパスの3つの庭の動画（ドローン等による撮影）を制作会社に依頼して作成したが、会期中は会場で公開し、終了後は中部大学のホームページに公開されている。

民族資料博物館はこの「中部大学創立80周年」の記念事業としてさらに、「キャンパス・

アートマップ」を作成した。これは春日井キャンパス内にある、文化施設と美術作品を紹介する新しい冊子であり、キャンパス内の庭や池などの自然環境と共に、7学部の校舎と共有エリアにあるアート（絵画、彫刻、工芸等）を地図で紹介する地図冊子である。

最後になるが、中部大学民族資料博物館の活動にあたっては、同博物館の運営委員会と外部専門委員会の委員各位をはじめ、中部大学内外の多くの関係者のご協力、ご指導いただいている。深くお礼申し上げたい。

中部大学民族資料博物館長・人文学部教授



民族資料博物館（附属三浦記念図書館2階）



2019秋季企画展 関連講演 2019年10月29日

博物館活動報告



附属三浦記念図書館1階 民族資料博物館 入館案内

展示／常設展

常設展

会場： 民族資料博物館 展示室
期間： 2019年4月1日（月）～2020年3月31日（火）
内容： 当館所蔵資料より重要資料を展示。
出品： 2,000点
入館： 4,679人

2019年12月に、附属する図書館内の建物全体の天井照明をLED照明へ変更する工事にともない、同建物に展示室および事務室、収蔵庫、作業室等を要する博物館においても関連施設の全ての天井照明をLED化した。常設展示のうち、一部の照明本数を減らしていたコーナー展示においても、展示全体における統一した明るい展示空間作りを考慮し、もとの照明本数に戻すことにした。

またこれにともない、常設展の地域研究エリアの展示室全体における展示資料の配置レイアウト等を見直すこととなった。2019年度末の段階では、アフリカ地域の展示資料の配置レイアウトを一部改編し、解説パネル、およびスポットライトを増設し、来場者の動線と視点の動きを再検討した。あわせてその他の地域研究エリアの展示資料の配置を見直すにあたり、まず壁面に色別の布を貼り、展示室全体のなかでゾーンの区分をよりわかりやすくする試みを行った。



民族資料博物館 常設展示 アフリカ松浦コレクション展示



民族資料博物館 体験実習室の素材研究テーマ展示コーナー

伊藤平左エ門のカメラコレクション展

「クラシックカメラで撮った写真」

- 会場： 附属三浦記念図書館1階エントランスホール
期間： 2019年9月10日（火）～14日（土）
内容： 大学所蔵のクラシックカメラコレクションのうち、一部をテーマに合わせて展示。
今年度は、選別したカメラ機器で実際に撮影し、フィルムネガを同好会自身で現像した写真をあわせて展示し、アナログカメラの写真の魅力を紹介。
- 出品： カメラ13台、写真14枚
主催： 中部大学平左エ門カメラ同好会／中部大学民族資料博物館
企画代表： 内藤 和彦 中部大学名誉教授・平左エ門カメラ同好会世話人
入館： 約100人



ポスター



展示会場

標記展を記載どおり開催した。総入場者数は、展示場所がエントランスホールのため、実数のカウントはできなかった。概数で、百名ほどだったが、12日は中部大学フェアに参画したこともあって、その日だけで三十名を超える入場があった。

今回は、副題のとおり、伊藤先生のライカを中心としたクラシックカメラで撮影し、同好会会員が自ら現像・引き延ばしを行い、展示する事とした。フィルムの調達や各種薬品、DPE機器材の入手はネット購入のおかげで何とかなったものの、本学からは「暗室」がなくなっていた。長久手の「貸暗室」を利用し、実現できたが、もう一つ問題があった。我々のDPE技術や勘を取り戻すのが最大の難関だった。しかし、我々が今まで行ってきた「カメラの一部動態保存」の実績を何とか示すことが出来た。こうした保存事例は全国的に見ても希少である。これは、私と大西良三前学園長との約束ごとでもあった。展示出来た写真の出来栄はともかく、我々は十分満足している。そして、つくづく「動態保存」の難しさを実感させられた。

そもそも、平左エ門先生の集めたカメラを貰い受けたのは、大西先生だった。空間づくりを生業としている者の一人として私は、大西先生を高く評価している。著名な建築家や作庭家やデザイナー達の力は借りているものの本学のキャンパスは大西先生の「作品」だと思っている。建築計画と都市計画の狭間にあるこの手のスケールの作品事例は少なく、ほとんど誰も手掛けていない。「作品」と呼べるものは皆無に近い。建物、広場、道路の形態・配置はおろか植栽や庭、茶室、彫刻、絵画に至るまで配慮が行き届いている。一見、無関係あるいは気まぐれにも見える民族資料、レコード、茶器、カメラの収集もある。私には、先生がキャンパスデザインの一環として本学の担うべき「文化（芸術）の創造と継承」のイメージを模索していたように思われてならない。先生の「文化」に対する畏敬に近い思いと感性をこれらから汲み取ることができる。「カメラの動態保存」もその一つである。何かにつけ、ゆとりのなくなった昨今の大学だからこそ大切にしていきたいと思う。

(内藤)

学校法人中部大学創立80周年記念 2019秋季企画展 「中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久」展

第一展示室：「作庭家、岡田憲久による中部大学3つの庭」

第二展示室：「中部大学春日井キャンパスのはじまりと今」

会場： 民族資料博物館シルクロード室+多目的室

期間： 2019年10月15日（火）～2020年1月14日（火）
（学内関係対象で2月14日まで公開延長）

内容： 学校法人中部大学創立80周年記念事業の一環で企画、実施。第一展示室は、大学キャンパスにおける三つの庭園について、造園の観点から施工、および修復の状況を示す写真資料、図面、記録動画、造園デザイン用資料を展示。

第二展示室は、大学の歴史について、建築と緑の調和するキャンパスの景観にテーマを定め、これまでの推移を、開学前後、80年代の高層建築と広場の整備、書院をはじめする緑地帯の整備、といった主に三つの時代区分に分けて関連資料および写真資料を展示。

出品： 第一展示室：77点 第二展示室：52点

催事： 関連講演

岡田 憲久 10月29日・附属三浦記念図書館3階
セミナールーム／他、庭園見学会（計4回）
（内容は、民族資料博物館『講演記録 2019』参照）

企画： 荒屋鋪 透、前田 富士男、原田 千夏子、景観設計室
タブラ・ラサ

入館： 1,402人

本学は、文理7学部を一つのキャンパスに要し、建築群と緑化整備を総合的な計画のなかで進められてきたことで、自然と建物が共生する美しいキャンパス空間が創られてきた。このことは、国内外の大学を見渡しても稀な事例として、本学が誇るべき歴史である。今年、学校法人中部大学創立80周年記念を迎えることから、キャンパス内に作られている主な庭園を企画展テーマに取り上げることで、整備計画のこれまでの経緯を再認識する機会としたいと考えた。また、キャンパス空間は作り上げるだけでなく、「今」を生き続けている生の空間である。本来あるべき姿を維持管理していくという新たな課題と常に向き合う使命が課せられている。そのために、私たちは、あらためて身近に過ごしているこのキャンパスの成り立ちの起源をみつめ直し、今後の未来を考えていくべきではないかと考えた。

展示協力いただいた岡田憲久氏は、工法庵・洞雲亭庭園、2号館中庭、25号館中庭の3つの庭園の作庭を手掛けられ、平成の初め頃より、本学の整備活動に実際に携わられた一人として、当時の状況を造園の立場から知る人物である。展示のなかでは、第一展示室において、岡田氏の記録資料から、各庭の制作過程を記録写真によって紹介いただくことで、活動に携わってこられた多くの先人たちの活動の様子をあらためて知る契機となった。

第二展示室では、本学の春日井キャンパスの、1960年代の校地取得時期の図面資料や、創立者の肉筆原稿をはじめとする大学開学時期の記念資料、さらに80年代から90年代にかけて行われたキャンパス整備計画の状況を航空写真や建築計画のための関連資料、当時の大学案内パンフレットを展示し、これまでのキャンパスの変遷を概観する内容にして紹介した。各資料については、学内の関係部署に情報提供の協力を得て陳列が適った。

あわせて、庭園とは、天候や地勢、植物といった生き物によって構成されている場所であるため、年月を経ること



第一展示室
（作庭家、岡田憲久による「中部大学の三つの庭」）



第二展示室
（中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今）

で景観が変わってしまうという難しさもある。例えば、樹木が生い茂り、鑑賞ポイントの景観が変化してしまう、木材の老朽化、敷石の亀裂や、コンクリート面の劣化や汚れなどに対し、新たな素材への入れ替えや、日々の清掃作業など、人の手による丁寧な維持管理が必要である。この点においても、2018年から2019年にかけて、本学では、岡田氏の協力のもと、3つの庭の改修整備を実施し、「保存」への意識を共有していくことの重要性を学んだ。（原田）

秋季企画展（第一展示室）ポスター

80
中部大学創立80周年記念

中部大学

UNIVERSITY GARDENと
岡田憲久 展

2019年10月15日[火]～2020年1月14日[火]

中部大学民族資料博物館 シルクロード室 / 多目的室他

開館日: 土・日・祝日・年末年始(および大学の定休日)を除く。11月19日(土)、11月20日(日)は大学行事につき特別開館します。

PROFILE

岡田憲久
(Okada Norihisa)

名古屋造形大学特任教授・景観設計室クブラ・ラサ主宰
2009年 日本造園学会奨励賞、2011年愛知県芸術文化奨励文化賞、
2011年 日本造園学会賞(武田薬品創薬所の全体景と百庭—丸山八海の庭—)
2013年 第23回都市公園コンクール国土交通大臣賞(太田川駅前イペント広場)
主な著書に『日本の庭—ことばはじめ』(TOTO出版)他。

関連書籍

中部大学
3つの庭に込めた思い

講師: 岡田 憲久 (御庭家・景観設計室クブラ・ラサ主宰)
日時: 2019年10月29日(火) 14:00～15:30
会場: 中部大学附属三浦記念図書館セミナールーム
司会: 荒屋鋪 透 (中部大学民族資料博物館長・人文学部教授)

敬請の意(中部大学のシンボル)

中部大学民族資料博物館
MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

【開館時間】9:30～16:30(休館日を除く20時前) 【休館日】土曜・日曜・祝日・年末年始・大学が定める休日の行事開催時は異なります 【入場料】無料
〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200 TEL.0568-51-9193 FAX.0568-51-9194 E-mail minzoku@office.chubu.ac.jp https://www3.chubu.ac.jp/museum/

秋季企画展（第一展示室）出展作品リスト

第一展示室(シルクロード室)

2019秋季企画展 学校法人中部大学 創立80周年記念
「中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久」展
 2019年10月15日（火曜日）～2020年1月14日（火曜日）
 中部大学民族資料博物館 シルクロード室

資料名称	解 説	形 状
■中部大学 三つの庭		
1 中部大学 春日井キャンパス 全図		パネル
2 工法庵・洞雲亭庭園	沢と書院の景※	写真パネル
3 みなもの庭（2号館中庭）	テラスを流れる水路とコンクリートの陰影※	写真パネル
4 花鏡の庭（25号館中庭）	花鏡の水面にセンダンの木の影が落ちる※	写真パネル
■工法庵・洞雲亭庭園 施工過程		
5	書院から庭を臨む※	写真パネル
6	沢と護岸、書院の景	写真パネル
7	キャンパス内に現れる露地門（上）/書院玄関周り（下）	写真パネル
8	流れを堰き止めた広い水面上を渡る石橋	写真パネル
9	待合付近の景（上）/滝の水を竹樋で水鉢に落とす（下左） /瓦を埋め込んだ延べ段（下右）	写真パネル
10	待合へ振り返った景	写真パネル
11	待合から工法庵のにじり口へ	写真パネル
12	工法庵にじり口付近の景	写真パネル
13 茶室・書院廻り庭園 基本計画図		図面
14 平面図		図面
15 計画平面図		図面
16 詳細図		図面
17 流れと護岸のイメージ図		図面
18 修繕指示図		図面
■みなもの庭（2号館中庭） 施工過程		
19	ケヤキの足元から水の流れが始まる夏の景色※	写真パネル
20	テラスに穿たれた「月」と結界を表す陶板のライン、 芝生には「太陽の石」※（上）/芝生の余白空間※（下）	写真パネル
21	池から細い水路へ（上左）/コンクリート舗装に陶板で一二三石を 現代的にデザイン※（上右）/2階からネムノキの梢越しに 「太陽の石」を臨む※（下）	写真パネル
22 全体計画平面図		図面
23 詳細図		図面
■花鏡の庭（25号館中庭） 施工過程		
24	庭の全景※	写真パネル
25	光にきらめく水紋	写真パネル

資料名称	解説	形状
26	季節ごとに花が変わる中で（2005年）（上）/焼き物のモザイク（下左）/アスチルベ、サルビア、モナルダなど（2005年）（下右・上）/石のベンチ※（下右・下）	写真パネル
27	ベンチは幅広にデザインしたため縁台のようにも使える。憩いのひと時（2005年）	写真パネル
28	平面図・イメージスケッチ・水景断面図	図面
29	樹木植栽竣工図	図面
30	草花植栽竣工図	図面
31	第1期エスキース	図面
32	第1期平面図・詳細図	図面
33	第1期施工図（清水建設）	図面
34	岡田憲久 活動暦	パネル
35	中部大学 春日井キャンパスの歴史（建築と緑化活動）	パネル

資料名称	解説
■造園材料・素材	
36 インスタレーションの延べ段	セラミックルーバー・織部釉陶板・瓦（輪違、のし）、ツク、石（玄武岩、大理石）による
石	
37 花崗岩（緑色、中国産）	スクラッチ仕上げ 大岐阜ビル 公開空地で使用
38 花崗岩	スクラッチ仕上げ 引っ掻いたような跡を出すため石工場と試行錯誤した
39 花崗岩	コブダシ仕上げ（グレー）とノミキリ仕上げ（サビ）
40 花崗岩 カシミールゴールド（インド産）	ジェットパーナー仕上げとレーザー仕上げ
41 花崗岩 カシミールホワイト（インド産）	
42 花崗岩 ムーンホワイト（ブラジル産）	東海市太田川駅 駅前広場（西）、大田公園にて使用
43 花崗岩（緑、中国産）	本磨きの上、割肌仕上げ。安城市総合斎苑にて使用
44 鉄平石（インドネシア産）	長久手温泉ござらっせにて使用
45 琉球石灰岩（沖縄産）	東海市太田川駅沖縄広場にて使
46 大理石のボーダー	
47 大理石（白）	
48 大理石（ブルサ・ローズ、トルコ産）	東海市太田川駅前どんでん広場のシスターシティガーデンにて使用
49 ごろた石	
50 木曾川玉石	
51 自然石（インドネシア産）	タワー・ザ・ファースト静岡の屋内茶室露地に使用。武田薬品工業研修所
52 チャート碎石（岐阜産）	石庭—九山八海の庭—の石組も同種のもの

資料名称	解説
陶	
53 釉薬タイル各種（美濃焼）	
54 織部釉の大判タイル、忠野釉の大判タイル。四角タイル。	
55 陶	武田薬品工業研修所ランドスケープで使用したもの。錠剤の色をイメージ。
56 陶	同朋大学キャンパスにて使用したもの。
57 陶板	のし瓦の小端立てを陶板に替えたかどうか試行錯誤していた際に製作してもらった厚みのある陶板。
58 陶	東海市 太田川駅前どんでん広場のロングベンチで使用したもの。海の色を抽象化。
59 タイル（美濃焼）	表面の風合いは手作業による。国際子ども図書館（安藤忠雄設計）に使用されたと聞いている。中部大学 花鏡の庭にて使用。
60 イズニック・タイル（トルコ）	東海市太田川駅前ランドスケープを設計する際、東海市の姉妹都市があるトルコを訪れ、イズニック・タイルと出会った。
61 セラミックルーバー各種（美濃焼）	
62 セラミックルーバー（いぶし）	大岐阜ビル 公開空地で使用したもの。積層して立ち上がらせ、端部を織部釉のタイルで閉じた。
63 モザイクタイル（美濃焼）	中部大学 花鏡の庭の寛の支柱に使用したもの。
64 窯道具（瀬戸）	エンゴロ、エゴロ、サヤ。自然釉がかかっている。椋山女学園大学小庭、中部大学 花鏡の庭の方モザイクに使用。
65 窯道具	L字型のツク。名古屋造形大学の窯で水が染みないように、白い釉薬をかけて再度焼いてもらった。椋山女学園大学小庭、中部大学 花鏡の庭の方モザイクに使用。
66 レンガ（半田）	東海市 大田公園、15m歩道（東）に使用したもの。
瓦	
67 獅子文留蓋瓦（愛知県高浜市産）	
68 素丸瓦（三州瓦）	三河高浜駅前 瓦の庭、中部国際空港アクセスプラザガーデンなどで使用。
69 輪違瓦（三州瓦）	三河高浜駅前 瓦の庭に使用するため、黄瀬戸と織部釉をかけて焼いてもらったもの。
70 磚（赤）	中国の敷き瓦。
71 磚（いぶし）	中国の敷き瓦。落合公園（春日井市）では磚で大面積を舗装した。
その他	
72 ガラスルーバー	
73 コンクリート平板（透水性）	東別院参道にて使用したもの。表情、色等を特注した。
74 コンクリート平板（透水性および非透水性）	太田川駅前ランドスケープにて使用。
■L判写真	
75 L判写真288枚による コレクション	庭づくりのインスピレーションとなった空間、物を撮影したもの
■書籍	
76 『作庭記』田村剛著、相模書房（1964）	
77 『日本の庭 ことはじめ』岡田憲久著、TOTO出版（2008）	

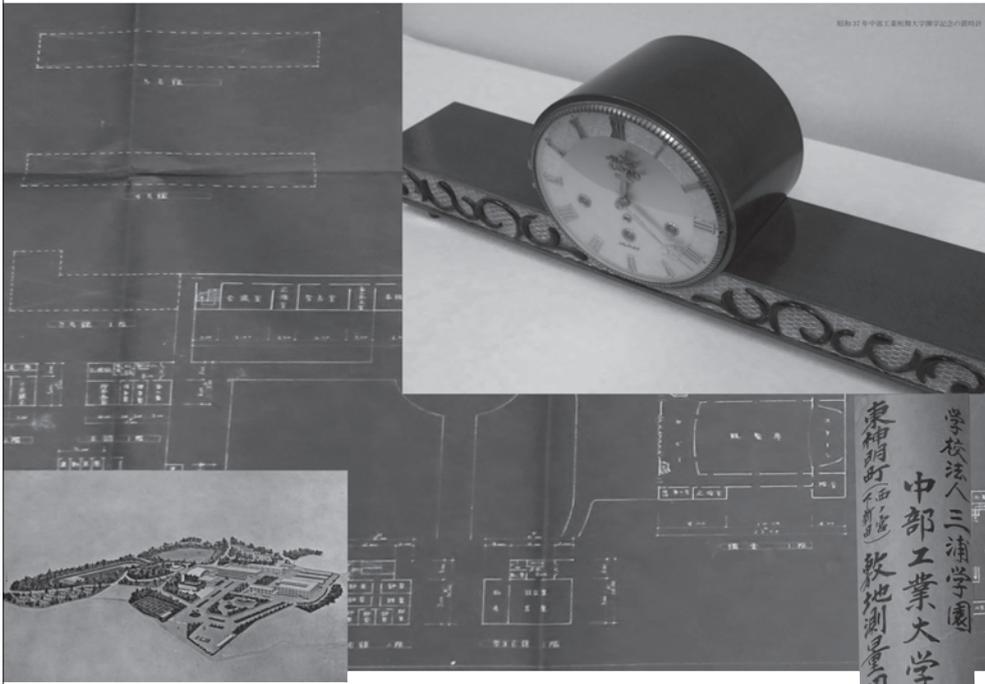
（備考）写真撮影 ※印は中部大学、それ以外は景観設計室タブラ・ラサ

2019秋季企画展 第二展示室
(中部大学民族資料博物館 多目的室)



学校法人中部大学

中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今



昭和21年中部工業短期大学開学記念の遺物写真

昭和17年中部工業短期大学開学当時の記念建築写真

学校法人三浦学園
中部工業大学
東海町(西三河) 牧地測量園係

学校法人中部大学創立80周年記念
— 2019年度秋季企画展開催中 —

2019年10月15日[火]～2020年1月14日[火]

中部大学民族資料博物館 シルクロード室／多目的室他

閉館日は、11月10日(年末年始)および大学が定める休日ですが、11月9日(土)、11月16日(土)は大学行事により特別開館します。

中部大学民族資料博物館
MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

【開館時間】9:30～16:30(入場は開館の30分前) 【休館日】土曜・日曜・祝日・年末年始・大学が定める休日(行事開催日は開館予定) 【入場料】無料
〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200 TEL.0568-51-9193 FAX.0568-51-9194 E-mail minzoku@office.chubu.ac.jp <https://www3.chubu.ac.jp/museum/>

秋季企画展（第二展示室）出展作品リスト

第二展示室(多目的室)

学校法人中部大学 創立80周年記念
2019秋季企画展 第二展示室
「中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今」

2019年10月15日（火曜日）～2020年1月14日（火曜日）
中部大学民族資料博物館 多目的室

資料名称	寸法	形状	所蔵
1 「中部大学のはじまりと今」、キャンパスの建築整備の流れ		パネル	
2 中部大学の建築基本方針		パネル	—
3 中部大学 春日井キャンパス航空写真（2019年現在）		写真パネル	—
【1 校地取得と造成、主要な棟の建設：1960年代 ～未来を見据えた、建物の軸線の統一】			
4 校地取得当時の航空写真 昭和37年頃		写真パネル	—
5 創立者 三浦幸平先生		写真	—
6 創立当初の名古屋第一工学校校舎（元金城英語学校） 昭和13年頃		写真	学校法人中部大学
7 名古屋第一工学校 卒業アルバム		冊子	学校法人中部大学
8 東海産業大学（現 中部大学）平面図（青焼） 昭和36年 ※大学名が仮称で図面が作成された		図面	学校法人中部大学
9 図面入 学校法人三浦学園 東神明町敷地関係図（測量図（縮尺図）他）	90（径10）		学校法人中部大学
10 図面入 学校法人三浦学園 大泉寺町敷地関係図（測量図（縮尺図）他）	90（径10）		学校法人中部大学
11 測量図（400分の一 縮尺図）：中部工業大学 東神明町敷地	78.7×54.5	図面	学校法人中部大学
12 中部大学 学章		パネル	—
13 設計図面（2号館一期工事）昭和36年6月	42×59.5	冊子	学校法人中部大学
14 置時計（昭和37年 中部工業短期大学開学記念）	W62×D12.8×H23.5		学校法人中部大学
15 絵葉書（昭和37年 中部工業短期大学開学記念）	15×11	葉書	学校法人中部大学
16 「結晶」第一集（校正用原本） 1961年	18×16	冊子	学校法人中部大学
17 創立者 三浦幸平先生 肉筆原稿		原稿	学校法人中部大学
18 開学当時のキャンパス風景		写真パネル	—
19 開学当時のキャンパス風景（「中部工業大学大学案内 1970年」より）		冊子	—
20 校地取得当時の手続書類 一式			
春日井地質調査	19.5×26.5	綴り	学校法人中部大学
開拓地転用申請書	19.5×26.5	綴り	学校法人中部大学
春日敷地に関する綴り	19.5×26.5	綴り	学校法人中部大学
工業大学建設用地申請書	19.5×26.5	綴り	学校法人中部大学
21 文部省等実地視察関係綴り 昭和39～48年	20×25.5	綴り	学校法人中部大学
22 設計図面（2号館一期工事）昭和34年6月	42×59.5	冊子	学校法人中部大学
23 建築物ごとの図面・申請手続き書類綴り 一式			
確認通知書（一号館・二号館）	19.5×26.5	綴り	学校法人中部大学
確認通知書（三号館・四号館）	19.5×26.5	綴り	学校法人中部大学
確認通知書（六号館）	19.5×26.5	綴り	学校法人中部大学
確認通知書（十二号館）	19.5×26.5	綴り	学校法人中部大学
24 設計図面 1号館 第一期増築工事 他各所改修工事 大西設計 昭和50年まで		図面	学校法人中部大学

資料名称	寸法	形状	所蔵
25 設計原図 9号館 第一期工事 昭和35年頃		図面	学校法人中部大学
26 設計原図 立面図 9号館 第一期工事 昭和35年頃		図面	学校法人中部大学
27 設計原図 立面図 9号館 第二期工事 昭和39年		図面	学校法人中部大学
28 設計原図 立面図 9号館 第三期工事 昭和42年		図面	学校法人中部大学
29 校地の造成工事の様子 (調印式) 昭和35年		写真パネル	—
30 校地の造成工事の様子 (起工式) 昭和36年		写真パネル	—
31 校地の造成工事の様子 昭和36年		写真パネル	—
32 校地の造成工事の様子 (2号館基礎工事) 昭和36年		写真パネル	—
【2 キャンパス・コア計画：1970年代から1980年代 ～ 建物を相互に組み合わせ、動線を意識した景観作り】			
33 中部工業大学 春日井キャンパス航空写真 1979年		写真パネル	—
34 キャンパス・コア計画 (「中部工業大学整備計画 (1974年3月)」より転載)		パネル	—
35 設計図面 (19・20号館新築工事)	40×54	冊子	学校法人中部大学
36 「ゾーン概念図」(中部工業大学整備計画 春日井キャンパス現況編 1974年3月 一級建築士事務所 第一工房より)		冊子	個人
37 「アプローチとキャンパス内動線図」[中部工業大学整備計画 春日井キャンパス現況編 1974年6月 一級建築士事務所 第一工房より]		冊子	個人
38 平面図「総合計画と施設」[中部工業大学 大学案内 1966年]より)		冊子	個人
39 「中部大学 大学案内 1985年」※中部工業大学より改称		冊子	個人
40 創立者のことば (「学園創立者 三浦幸平先生」より)		冊子	個人
41 「中部大学 大学案内 (英語版)」パンフレット		冊子	個人
【3 建物と自然地形を活かした緑化環境の整備：1990年代以降 ～ 次代への継承へ向けて】			
42 中部大学 春日井キャンパス 航空写真 1994年		写真パネル	—
43 「中部大学女子短期大学 学生便覧 1994年」		冊子	個人
44 「中部大学女子短期大学 入学案内 1996年」		冊子	個人
45 春日井キャンパス地上現形測量図 平成7年4月作成 ※キャンパス北部エリアの整備の様子		冊子	個人
46 中部大学 ロタンダ 設計図 平成6年	21.5×30.5	綴り	学校法人中部大学
47 「中部大学 大学案内 1999年 (英語版)」		冊子	個人
48 「中部大学通信」 1992年(平成4年) 3月15日号		印刷	個人
49 「幸友」 第2号 平成11年		冊子	個人
50 中部大学 春日井キャンパス 樹木調査図 (作成 1993年10月)	89×120	図面	個人
51 「洞雲亭の春」作歌 赤塚行雄 (「中部大学女子短期大学 学生歌集」1995年より)		パネル	—
52 CUJC学生歌「ゆめとやすらぎ」作歌 赤塚行雄 (「中部大学女子短期大学 学生歌集」1995年より)		パネル	—



2019 秋季企画展 第二展示室
(中部大学民族資料博物館 多目的室)

中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今



学校法人中部大学創立 80周年記念

2019年10月15日[火]～2020年1月14日[火]

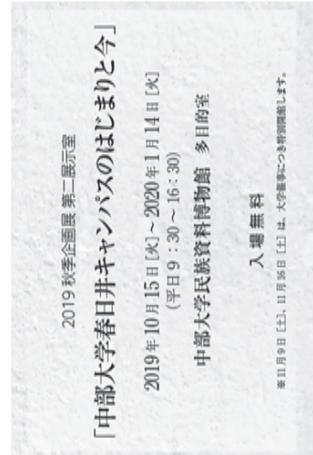
中部大学民族資料博物館 多目的室

創立者 三浦幸平先生の肉筆原稿を初公開展示します

2019 中部大学春日井キャンパス・アートマップ、完成



学校法人中部大学創立 80周年を記念し、
大学構内に設置している美術作品の一部を
紹介する散策用のマップを 2019年、秋に作成



学校法人中部大学 春日井キャンパス 2019秋季企画展 第二展示室 「中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今」 2019年10月15日(火曜日)～2020年1月14日(火曜日) 中部大学民族資料博物館 多目的室

展示室	展示	展示	展示
1	「中部大学のはじまりと今」	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
2	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
3	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
4	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
5	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
6	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
7	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
8	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
9	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
10	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
11	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
12	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
13	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
14	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
15	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
16	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
17	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
18	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
19	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
20	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
21	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
22	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
23	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
24	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
25	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
26	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
27	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
28	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
29	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
30	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
31	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
32	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
33	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
34	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
35	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
36	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
37	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
38	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
39	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
40	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
41	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
42	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
43	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
44	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
45	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
46	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
47	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
48	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
49	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
50	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
51	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル
52	中部大学への発展と歴史	春日井キャンパスの発展と歴史	写真・パネル

中部大学民族資料博物館
Museum of Ethnology and Cultural Heritage
Chubu University
〒467-8501 愛知県春日井市春日井3-1-1
TEL:0562-521111 FAX:0562-521112
E-MAIL:ethnology@chubu-u.ac.jp

1960

第1章 校地取得と造成、主要な棟の建設

— 未来を見据えた、建物の軸線の統一 —

1960年代

春日井キャンパスは、昭和35年12月に学園所有となり、5万5千坪の広さから始まった。瀬尾平野を一望できるこの地は、もとより開拓農地が多くを占め、稜の木が植えられていた。



開学計画に描かれた設計図面（1964年 部分）
（原田設計事務所 制作）



開学当時の校舎

城郭建築であれば、本丸にある1号館と2号館の建設は、始めから海峽を視野に入れて設計され、その他の建物の建設順序を想定して計画されていた。2号館は、隣接する1号館とともに、期成会を継り返しているが、およその外観はそのままに、開学以来、本学の集約的存在としてあり続けている。

創立者や代々の理事長らは、視察で訪れた海外の大学キャンパスや、教会や広場を中心とした古都の空間設計を参考にしながら、大学の整備計画を考案していった。

■ 創立者のことば（抜粋）

「技術は人なり」ということを、わたしは常々いいますが、技術は各人の精神のあらわれだと思います。ただそれによって集約されたものではなく、その人のすべてが結集されたものだから、技術となつてあらわれ、その手でもつてあらわれ、熱中するものは、めづるものが見えようというのと同じで、そうならぬと、本学の技術は生まれてこないものです。

1970-1980

第2章 キャンパス・コア計画

— 建物を相互に組み合わせ、動線を意識した景観作り —

1970年代から1980年代

「キャンパス・コア計画」のメーンは、19号館と20号館、13号館（現在のキャンパスプラザに当たる部分）を合わせて建設するものであった。3つの建物の間、ナードの字形に開いた空間を形成し、地面に赤レンガを敷き、学生が集うことのできる明るい「広場」が誕生した。20号館は12階建の学園初の高層建築で、上方建築賞を受賞した。



1979年（昭和54年）のキャンパス全景



【総合計画】上部図
（中部工業大学 学務課 1966年より）

中部大学 春日井キャンパスの建築整備の流れ

- 1 主要棟の建設（建物と緑地の統一）
 - 1960年（昭和35年） 春日井校舎（現1号館）
 - 1961年（昭和36年） 第一期工事
 - 1964年（昭和39年） 第二期工事
 - 1966年（昭和41年） 建築委員会発足・第三期工事
- 2 建物を組み合わせ合わせた景観作り
 - 1970～1974年（昭和45～49年） 新たなキャンパス計画の構想
 - 1975～1979年（昭和50～54年） キャンパス・コア計画、国際関係学部
 - 1980～1984年（昭和55～59年） 中部工業大学から中部大学へ経営権移譲
- 3 建物と自然地形を活かした緑化環境の整備
 - 1985～1989年（昭和60～平成1年） 中部大学女子短期大学・建設・茶室の整備
 - 1990～1994年（平成2～平成6年） 工学部一階、二期工事、工学30周年
 - 1995～1999年（平成7～平成11年） 人文学部・研究奨励の整備
 - 2000～2004年（平成12～平成16年） 応用生物学部、工学40周年
 - 2005～2009年（平成17～平成21年） 生物資源科学部、現代教育学部
 - 2010～2014年（平成22～平成26年） 図書館二回目の増築工事、工学50周年
 - 2015～2019年（平成27～平成31年） 体育所・看護・池袋校舎の整備・整備

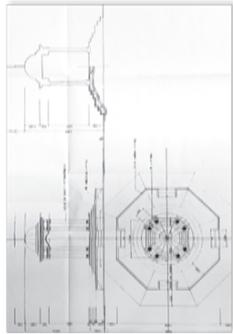
1990-

第3章 建物と自然地形を活かした緑化環境の整備

— 次代への継承へ向けて —

1990年代以降

1989年（平成元年）に、同キャンパス内に中部大学女子短期大学を開設するにあたり、短期大学の校舎は新築の本館（現25号館）と、もともとあった中部工業大学附属風琴高等学校の校舎を取り壊し、また既存の建物を一部壊して改築して再利用する方針がとられた。



ロタンダ設計図面（1994年）部分（大西設計事務所 制作）

また、この年は約5年の歳月を経て20号館北側の地域において茶室と書院茶室「工法庵」は、実務教育に役立つため、伊藤平左エ門名譽教授の指導のもと、建築学科の教員らと卒業生ら共同研究により利休茶室「待庵（国室）」に共通した作りでの復元を試みたものである。

文庫から原寸図を揃え起こし、天井の皮付丸太は大学館内の林から切り出し、床柱は建設地で伐採した節の木を採りて使用するなど身近な材を活用する工夫もされた。

1995年（平成7年）には、書院周囲の一角に、東京の靖国神社の古祠を再利



ロタンダ

1994年、大学開学30周年記念に新築校舎ハイオ大学より建て替えていた書院（新築）



《運動》

清水 多磨子
【プロコン建築】

第3学生ホール
2010年開学30周年記念に新築校舎ハイオ大学より建て替えていた書院（新築）

講演 1

講評会

2018（平成30）年度

特別講座＜古典絵画＞

受講生制作作品発表展示——

平安時代後期から鎌倉時代の

古典絵画模写

《信貴山縁起絵巻》《伴大納言絵巻》

《平治物語絵巻》と作品

会場： 民族資料博物館 多目的室

日時： 2019年4月11日（木）

講師： 下川 辰彦 画家・日本美術院特待・中部大学民族資料博物館外部専門委員

内容： 当館企画の2018年度に実施した日本画実技制作講座を受講した一般参加者の制作作品に対する、指導講師による講評。実際の作品を前に、構成や彩色に関する助言や指導講師が先人より学んできた実話を紹介。他者の講評内容を聴講する点も受講生にとって学習の好機となり、次回作への意欲につながる。

※年度末から翌年度4月にかけての展示期間の後半に開催されるため、館の定期刊行物のニュースレター（年一回）、および年報（年一回）への記録も1年遅れとなる。

参加： 25人

2018年度の日本画実技の課題テーマは、平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての、我が国の伝統的な大和絵の確立期の代表的な絵巻物作品3点について、受講生によって担当場面を振り分けて模写制作にあたるもので難易度が非常に高いにもかかわらず、多くの受講生が完成域へ到達した。形態描写や彩色の構成について、指導講師よりの確な要点がそれぞれへ指摘され、今後のさらなる表現意欲が高まった。またあわせて、自由制作の創作作品を年間に並行して制作する点もここ数年の通例となっており、複数制作を試みる受講生も少なくない。制作方法や進行は各自の自由であるが、古典作品で学習した表現技法を、現代作品の自身の感性を活かした作品制作に応用する研究姿勢を、指導講師も重視していることから、講評の内容についても、模写と創作の連動したものの見方について、興味深い示唆がもりこまれた。

（原田）



特別講座 講評会の様子
（中央・指導講師 下川辰彦氏）

2019秋季企画展 関連講演

「中部大学 3つの庭に込めた思い」

会場： 附属三浦記念図書館セミナールーム
期日： 2019年10月29日（火）
講師： 岡田 憲久 作庭家、名古屋造形大学特任教授、景観設計室タブラ・ラサ主宰
司会： 荒屋鋪 透 中部大学民族資料博物館長・人文学部教授
内容： 秋季企画展の第一展示室の協力者で、大学の3つの庭の作庭家による講演。
企画： 荒屋鋪 透、前田 富士男、原田 千夏子
参加： 112人
庭園見学会： 10月29日（56人）、11月26日（33人）
12月17日（22人）、1月14日（80人）
記録： 本講演は『講演記録2019』8頁以下に記載。

2019秋季企画展会期中に、展示協力者の岡田憲久氏に本学の庭園の特徴と、制作過程の様子について、写真資料を交えながら講演いただいた。講演の終了後には、3つの庭を巡る見学会を開催し、ひきつづき、岡田氏に現地で解説いただいた。学内外から多くの方に参加いただいた点はこの分野への興味関心の高さをあらためて実感した。特に、ふだんは一般公開される機会が少ない、利休茶室の復元建築を備えた書院建築と、その庭園（工法庵・洞雲亭庭園）は、最も見学時間を割いたことからうかがえた。

その後、庭園見学会は会期中に3回開催し地域の一般の方の他に、造園に携わる研究者、および建築設計、またこの東海圏の石材や木工等の専門の方も数多く参加いただき、本学の庭をじっくり観察いただいた。工法庵・洞雲亭庭園は、ふだん一般公開はしていないこともあり、この機会を活用して訪問された方も少なくなかった。
(原田)



岡田憲久氏の講演



庭園見学会の様子

講座

2019年度

特別講座＜古典絵画＞開講——

金屏風の小下図制作

会場： 中部大学10号館106Jゼミ室
期間： 2019年4月17日（水）～2020年1月15日（水）
通年26回
講師： 下川 辰彦 画家・日本美術院特待・中部大学民族
資料博物館外部専門委員
担当： 原田 千夏子
受講： 16人（学外一般参加者＝受講料有料・定員制）

今年度の課題制作は、小下図作成用の小型のサイズだが、金屏風を左右2枚で一对の作品を制作することにした。屏風絵は、江戸時代の琳派をはじめ、日本人の生活空間のなかで独特に発展してきた表現形式の一つであるが、金地に彩色することは非常に難しく、また一筆ごとの運びも失敗ができないことから特に集中して取り組む必要があり、通常の和紙に描く場合とまた違った工夫が求められることを実技制作を通じて実感することになった。また2枚一組の画面構成を考える点も、古画をよく観察しながら、屏風という独特の空間表現を生かすモチーフをどのように配置するか等、様々な難関を解決していく工程がある。受講生のそれぞれの持ち味をどのように発揮していく一年となるか、楽しみであった。また、自由制作となる創作作品についても、各自が課題制作と並行して行っていく挑戦だった。それらの全ての過程と並走しながら、できるだけ個々の主体性と個性を活かした作品制作となるよう、指導面でこころがけたが、受講生一人ひとり努力した結果、作品に完成させることができたと思う。（下川）



特別講座の教室風景

2019年度 特別講座＜古典絵画＞

アンケート集計 アンケート回収 13名

アンケート前文「このたびは、当館の特別講座を受講いただきまして誠にありがとうございました。／皆様の声を今後の参考にさせていただきますので、以下のアンケートにご協力をお願い申し上げます。」

1. 講座全体について感想をおきかせください。

- | | |
|----------------|-----|
| ① 大変関心を深めた | 12名 |
| ② 普通 | 1名 |
| ③ あまり関心が持てなかった | 0名 |

2. 講座の内容でどのような点に関心を持ちましたか、具体的に教えてください。

- ・一緒に受講している皆さんの作品に学ばされることが多く、とても参考になります。
- ・様々な技法、混色絵の具の使用方法。
- ・構図どり、色の使い方等。
- ・今回は金屏風という台紙をいただき、その上に絵をのせる作業はむずかしかったです、良い機会を与えていただいたと思います。
- ・屏風に色を塗るのがとてもむずかしく、あとでボロツとはがれたり苦労しました。ニカワと絵具の割合が特に大変でした。
- ・講座の仲間の絵を観ることで自分の作品への参考になり次へのステップになり楽しく描くことができる。
- ・絵の具、筆の使い方、屏風の扱い方。
- ・今回はじめて金屏風にチャレンジしましたが配色や構図のむずかしさを痛感しました。かなり四苦八苦しましたが、完成できたことで良い勉強になりました。
- ・視点の動きで屏風絵の見え方に変化して行く事を体験することができ、興味を持ちました。
- ・屏風を描く時、紙と違って色がうまく塗る事が出来なかった。
- ・日本画の伝統的な材料、手法。

3. 講師の指導について、いかがでしたか。

- | | |
|---------|-----|
| ① 満足した | 13名 |
| ② 普通 | 0名 |
| ③ いまひとつ | 0名 |

4. 講師のどのような指導が良いと思われましたか。

- ・ 絵を描く時、絵に何を描き込むか、何を描きたいかを考えさせられた時。
- ・ 指示が具体的でわかりやすいです。
- ・ 実際の指導。
- ・ 幅広い技術の指導。
- ・ 日本画の奥深さにおぼれそうです。死んだ絵を生き返らせていただいております。
- ・ 先生はいつも生徒それぞれにあわせてご指導下さいます。引き出しがいくつもあるようで、感謝あるのみです。
- ・ 私自身の性格や描き方を知って指導していただける。
- ・ 行きづまった時に受けるアドバイスに視野がひらける気がします。
- ・ ていねいかつ親切に教えていただき成長できたと思います。
- ・ 風景画にはじめて挑戦しました。画面のとらえ方や色合いのバランスなど教えて頂きました。
- ・ 個々の出来に対してわかりやすく指導していただける事。
- ・ 各自の能力、感性に合わせ指導。

5. 事務的な連絡手続き等で、困った点やお気づきの点がありましたら教えてください。

- ・ よくしていただいて満足しています。
- ・ いつも連絡、手続きもスムーズなので困ったことはありません。
- ・ わかりやすかったです。
- ・ 親切に対応していただき感謝しております。
- ・ いつもしっかり連絡をして頂き、ありがとうございました。
- ・ 完璧です。

6. 今後、これに類した講座を開催する場合、受講を希望しますか。

- | | |
|---------|-----|
| ① 受講する | 13名 |
| ② わからない | 0名 |
| ③ 受講しない | 0名 |

7. 今後、希望される講座内容や、また改善を望まれる点など当館へのご意見・ご要望をお聞かせください。

- ・ 絹絵をもっと教えてほしいです。
- ・ 現状を継続して欲しい。



指導講師による実技指導の様子

開館日数・入館者数

2019年度の開館日数は、186日、入館者数の合計は4,679名である。この他、学内の別会場における催事(秋季関連講演:112人、通年にわたり開催する特別講座:全26回延べ416人)の参加者数延べ528人をあわせると、当館の2019年度の催事参加者は合計で延べ5,207人となる。下半期に毎月開催した庭園見学会への参加者数が増加の要因の一つである。

2019年度 特別開館対応をした主な催事

総件数: 8件 642人(参考:2018年度 42件、1,986人)

内訳

- ・休日の特別開館:7件 636人
- ・臨時休館中の特別開館:1件 6人

月	2019年度			(参考:2018年度)	
	開館日数	入館者数	備 考 (主な出来事・行事)	開館日数	入館者数
4月	20	640	入学式(1日)、高校による大学見学(2件)、特別講座作品展(3/22-4/17)	14	545
5月	21	700	春のオープンキャンパス(11日)、高校による大学見学(11件)、グループ見学(1件)	14	484
6月	22	740	父母との集い(15日、22日)、高校による大学見学(11件)	14	701
7月	23	430	高校による大学見学(7件)、グループ見学(2件)、研修内見学(2件)	6	321
8月	9	254	夏のオープンキャンパス(9~11日)	11	155
9月	7	83	高校による大学見学(1件)、海外博物館研究者見学(1件)	18	135
10月	18	651	秋のオープンキャンパス(5日)、秋季企画展示(10/15-1/14)、庭園見学会第1回(29日)、高校による大学見学(6件)、研修内見学(1件)、グループ見学(1件)	21	666
11月	21	497	父母との集い(9日、16日)、庭園見学会第2回(26日)、高校による大学見学(3件)、CAAC連続講義内見学(1日)、グループ見学(1件)	22	768
12月	17	313	高校による大学見学(5件)、庭園見学会第3回(17日)、グループ見学(2件)、海外博物館研究者見学(1件)	16	249
1月	19	321	小学校見学(1件)、グループ見学(2件)、庭園見学会第4回(14日)	18	170
2月	9	50	グループ見学(4件)	1	22
3月	0	0		21	203
計	186	4,679	※長期休暇以外の臨時休館期間 (8/20~9/22、10/7~10/14、1/15~3/31)	176	4,419

休日の特別開館：

- 1) 5月11日(土) 春のオープンキャンパス 28人
- 2) 6月15日(土) 「父母との集い」 67人
- 3) 6月22日(土) 「父母との集い」 68人
- 4) 8月9日(金)～11日(日)
夏のオープンキャンパス 235人
- 5) 10月5日(土) 秋のオープンキャンパス 44人
- 6) 11月9日(土) 「父母との集い」 54人
- 7) 11月16日(土) 「父母との集い」 140人

臨時休館期間の団体見学受入：

- 1) 9月4日(水) スミソニアン博物館 6人

授業利用

- 1) 5月30日(木) 国際関係学部
スタートアップセミナー 43人
- 2) 6月6日(木) 国際関係学部
スタートアップセミナー 37人
- 3) 6月12日(水) 人文学部
スタートアップセミナー 33人
- 4) 7月10日(水) 人文学部 授業内見学 9人
- 5) 9月25日(水) 現代教育学部 授業内見学
19人
- 6) 10月3日(木) 「国際基礎演習」 52人
- 7) 10月10日(木) 「国際基礎演習」 52人
- 8) 10月28日(月) 「博物館展示論」 34人
- 9) 11月1日(金) CAAC講義「旅と文学」 9人
(中部大学アクティブアゲインカレッジ)
- 10) 11月7日(木) 「博物館資料保存論」 33人
- 11) 12月23日(月) 「映像を読む」 7人

実績 2

団体見学

入館者数のうち、高校の大学施設見学受入件数は、47件、見学総数は合計1,954人となり、昨年度に比べ331人の減少となった。

- ・ 2019秋季企画展は、好評につき、学内対象に会期を1ヶ月延長し2月14日まで内部開催した。そのため、この期間の一般来館者、団体見学も入館者数に含めている。
- ・ 2月15日から3月22日まで（企画展示前までの期間）を整理準備期間として臨時休館した。
- ・ 3月23日から4月15日まで開催を予定していた「2019年度特別講座（古典絵画）受講生作品展——金屏風の小下図制作」は、新型コロナウイルス感染症対策につき、開催を延期した。
- ・ 3月23日より3月31日まで、新型コロナウイルス感染症対策につき、臨時休館とした。

2019年度 高校見学受入：

受入件数 47件、合計人数1,954人
（参考：昨年度51件、計2,285人）

2019年度 その他のグループ見学等の受入：

団体見学・交流等

- 1) 5月23日（木） ICOM関係者 8人
- 2) 7月5日（金） 国立台湾大学8人
- 3) 7月22日（月）～23日（火）
江南市赤十字奉仕団 56人
- 4) 7月26日（金） 春日井市教育委員会 夏季教職員研修会 26人
- 5) 10月4日（金） 中国 嘉興学院 16人
JST（国立研究開発法人科学技術振興機構）2019年度さくらサイエンスプラン
- 6) 10月15日（火） JICA海外研修員 15人
- 7) 11月21日（木） 展示協力者関連研究グループ 5人
- 8) 12月5日（木） 国際園芸アカデミー 16人
- 9) 12月6日（金） 展示協力者関連研究グループ 10人

- 10) 12月12日（木） 海外博物館関係者 3人
（イラク・スレイマニヤ博物館）
- 11) 1月17日（金） 大学交流式典出席関係者 14人
- 12) 1月24日（金） 春日井市北城小学校見学 89人
- 13) 1月24日（金） 展示協力者関連研究グループ 11人
- 14) 2月4日（火） 大学関連企業 3人
- 15) 2月6日（木） 大学関連企業 3人
- 16) 2月10日（月） 展示協力者関連研究グループ 5人
- 17) 2月12日（水） 大学関連企業 2人

出版

2019中部大学民族資料博物館秋季企画展『学校法人中部大学創立80周年記念 中部大学UNIVERSITY GARDENと岡田憲久展』、2019年10月、全59頁。

『CHUBU UNIVERSITY CAMPUS ART MAP (中部大学キャンパス・アートマップ)』、2019年10月、全20頁。

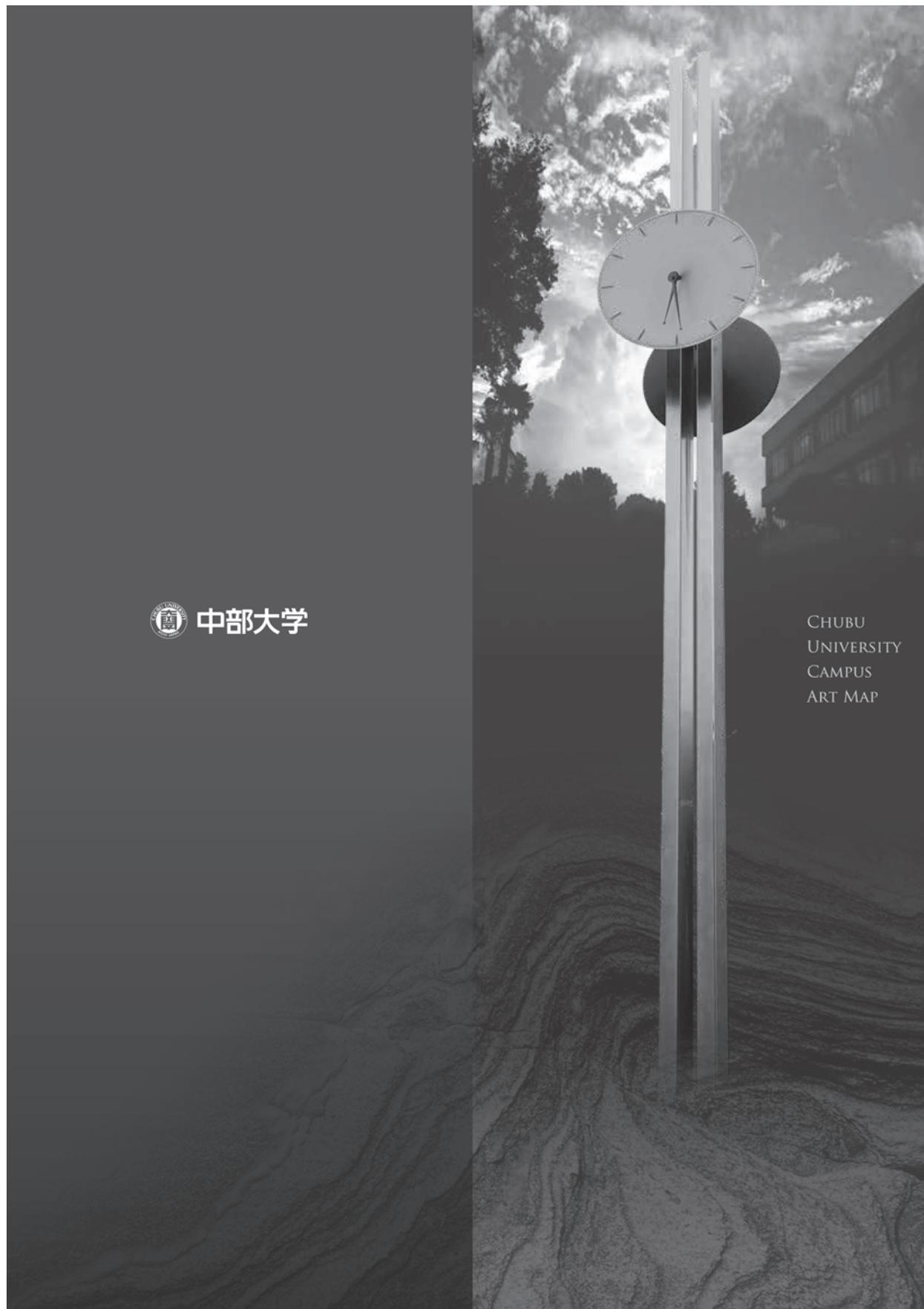
2019秋季企画展 第二展示室『中部大学春日井キャンパスのはじまりと今』リーフレット、2020年1月、3つ折印刷。

中部大学民族資料博物館『ニュースレター』16号、2020年1月、全8頁。

中部大学民族資料博物館『2019（令和元）年度特別講座「古典絵画」受講生作品展－金屏風の小下図制作－／記録集』、2020年3月、全47頁

『中部大学民族資料博物館 年報 2019』8号、2020年3月、全64頁。

『中部大学民族資料博物館 講演記録 2019』、2020年3月、全40頁。



 中部大学

CHUBU
UNIVERSITY
CAMPUS
ART MAP

中部大学 キャンパス・アートマップ

建学の精神



《不言実行》三浦幸平、書、1号館

建物と緑の共生するキャンパス

中部大学は、1962(昭和37)年に、春日井の地に中部工業短期大学を、1964(昭和39)年に中部工業大学を開学して以来、キャンパス全体を緑と建築群が融合する学びの景観を作り続けている。

およそ43万㎡におよぶ敷地には、正門から続く並木坂の頂上に設置した時計塔を起点に、キャンパス中央に南北にのびるメインロードを軸にし、東西各所に芝生の広場や池泉を配している。自然地形と自生の植栽をできるだけ活かし、建築と自然との共生を試みるなかで、正門西区域に木立のなかの散策路(通称バードロード)、図書館の南面と北面の各区域に開放的な芝生の広場を設け、構内のオープンスペースに彫刻や絵画等の美術作品を配することで彩りを添え、憩いの空間を作っている。



《創立者胸像(三浦幸平先生)》清水多嘉示
彫刻、バードロード周辺

創立者像を囲む空間では、「楷(かい)の木」が枝を伸ばす(2005年植樹)。中国の孔子廟の樹にちなみ、日本では「学問の木」といわれることから、学園の成長に対する祈りが込められている。

CONTENTS

- 中部大学キャンパス アート作品配置図 …… 03 ■
- 文化施設(三浦幸平記念室/工法庵) …… 03～04 ■
- 大学の歴史を彩る作家たち …… 05～06 ■
- 建築と庭、池泉と広場 …… 07～08 ■
- 彫刻と絵画のある空間 …… 09～11 ■
- 学部関連エリアのアート
- 工学部 …… 12 ■
- 応用生物学部 …… 13 ■
- 生命健康科学部 …… 14 ■
- 経営情報学部 …… 15 ■
- 国際関係学部 …… 16 ■
- 人文学部 …… 17 ■
- 現代教育学部 …… 18 ■
- キャンパスの四季 …… 19～20 ■



中部大学全景(春日井キャンパス)

中部大学校歌
作詞 佐藤一英
作曲 大平東二

二、
桃園の夢 新たにて
春日井の丘 白亜あり
命の泉 平和の火
時空響電の 頭脳充つ
かかやく われら中部大

三、
世界あまなく 待ちのそむ
思想と技術 おさめたり
智と火華と 花々と
見事にみえもるるなく
古人のねがい われら負う
柱で われら中部大

三、
万年の生 いくる 甲斐
たぎる血潮に立つ 時点
かえらざる 目を身に秘めて
深きいふきに 知恵を識る
光りみなぎる わが学舎
ちからさ われら中部大

表紙デザイン：黎明(れいめい)の知

広報

取材——

「中部大学にて「中部大学UNIVERSITY GARDENと岡田憲久展」が開催中!」、『プランツ & ガーデン』No.183、2019年11月1日、48頁。

2019年11月12日、12月9日 中部大学放送研究会「チューテレ」秋季企画展取材（11月27日大学内インターネット放映、12月15日～12月末日ケーブルテレビ放映）。

「構内の3庭園 魅力紹介—中部大で創立80周年企画展」、『中日新聞』、2020年1月10日、16頁。

「中部大の「美」マップに」、『中日新聞』、2020年1月17日、16頁。

「わが街ぶらり探訪（込められた物語感じて 中部大の3庭園）」、『中日新聞』、2020年1月29日、12頁。

大学広報——

「民族資料博物館」、『中部大学 2020 大学案内』、147頁。

「民族資料博物館」、『CHUBU UNIVERSITY CAMPUS LIFE 2019』、81頁。

「2018年度特別講座（古典絵画）受講生制作作品発表展示『学校法人 中部大学 学園報』第539号、2019年5月20日、3-4頁。

「2018年度特別講座作品講評会」、『学校法人 中部大学 学園報』第539号、2019年5月20日、4頁。

「2019年度特別講座（古典絵画）」、『学校法人 中部大学 学園報』第539号、2019年5月20日、4頁。

「2019年度特別講座（古典絵画）後期ガイダンス」、『学校法人 中部大学 学園報』第543号、2019年10月20日、4頁。

「2019 秋季企画展民族資料博物館「学校法人中部大学創立80周年記念中部大学UNIVERSITY GARDENと岡田憲

久」展」、『学校法人 中部大学 学園報』第544号、2019年11月20日、4頁。

「民族資料博物館秋季企画展講演会」、『学校法人 中部大学 学園報』第544号、2019年11月20日、4頁。

「民族資料博物館秋季企画展庭園見学会」、『学校法人 中部大学 学園報』第544号、2019年11月20日、4頁。

「中部大学 UNIVERSITY GARDENと岡田憲久」展 動画

<https://youtu.be/Kihb-44IRt8>

中部大学公式YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/user/ChubuUniv>

「◆受験生・在学生必見！—中部大学紹介・学びと歴史—」

その他（学外の催事案内）——

『おでかけガイド 愛知の博物館 2019.04～2019.09』、愛知県博物館協会。

『おでかけガイド 愛知の博物館 2019.10～2020.03』、愛知県博物館協会。

資料収集・保存等

本年度における寄贈資料と保存活動は下記のとおり。

寄贈資料——

計1点

内訳

・民族資料 1式（個人） ※ブータン関連資料

資料修復・資料保存等——

防虫管理対応として、展示資料のうち、虫害の報告のあった要所を定期的に見視観察と清掃をこころがけた。民族資料のうち、特に木製や植物繊維を材とするものや、染織衣料等へは専用防虫剤を定期的に入れかえを行った。

当館の収蔵資料総計は下表のとおり。

収蔵資料点数一覧

2020年3月31日現在

地 域		点数	計
シルクロード	コイン	616	719
	その他	103	
オセアニア	オセアニア	479	479 (76)
アジア	西アジア	74	882 (65)
	東アジア	531	
	東南アジア	201	
	南アジア	76	
アメリカ	アメリカ	259	259 (24)
アフリカ	アフリカ	96	96 (8)
ヨーロッパ	ヨーロッパ	159	159 (6)
その他	その他	1	1
小 計			2,595 (179)
その他：コレクション関連資料			1,439 (22)
合 計			4,034 (201)

() は、写真・映像資料数。書籍および参考資料は除く。

教育・普及

生涯学習の企画及び実践——

特別講座〈古典絵画〉の開講

- 会場： 中部大学10号館106Jゼミ室
期日： 2019年4月～2020年1月
参加： 通年・連続26回／学内無料／一般参加受講料
有料
定員制＝16人（通年）
目的： 大学博物館における絵画制作素材研究を通じて生涯学習の教育普及。
概要： 日本画(絹絵・板絵・日本画)の実技制作を通じて伝統的な天然材料や技法について大学の専門性の高い学習内容を紹介。地域社会との連携活動として毎年、開催し、体験学習を実践、普及する活動である。

2019年度は、自由課題の創作作品と並行し、金屏風の小下図を一人基本的に2枚一对の制作を試みた。モチーフは、古典作品の模写や、写生した植物や風景、伝統文様の図案等の再構成など自由だが、左右に2つの空間を組み合わせた画面構成や、金地という滑らかな表面に彩色するという、新たな挑戦について、年間を通じて取り組んだ。完成作品は年度末に、博物館内で展示会を開催し、発表・講評・討議を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症対策につき、時期を延期した。

- 指導講師： 下川 辰彦 画家・日本美術院特待・中部大学民族資料博物館外部専門委員
担当： 原田 千夏子

その他の教育普及活動——

JICA「産業技術教育」研修員の民族資料博物館見学について

- 会場： 民族資料博物館 常設展示室
期日： 2019年10月15日（火）
参加： 15名
担当： 宮川 秀俊 中部大学現代教育学部教授
中部大学JICA研修支援室

中部大学で受託している国際協力機構（JICA）課題別研修「産業技術教育」の第6回が10月15日から11月21

日まで実施されました。今年も恒例通り、初日の開講式に引き続いて民族資料博物館を訪問しました。博物館見学は、中部大学の学術施設の一つとして紹介し、世界各国から来日しているJICA研修員にその存在を知っていただいています。図らずも、これまでの研修ではアフリカからの参加者が99名中49名と多く、また、博物館にはアフリカの展示物が多いこともあり、本学に親近感を持つ研修員も多いようです。

さて、毎日の研修後には研修員に当日の評価票（内容：印象、質問、提案等）を渡して、提出していただいています。博物館見学についても、研修員12ヶ国12名の評価票を収集し、英文を和訳して、次のような3つの観点からまとめました。（以下）このように全研修員から好感の回答が得られており、6週間の研修のスタートの時期における博物館訪問の意義と成果が認められたように感じます。

このことが博物館理解と日本に滞在するにあたっての信頼感・安堵感につながらうれしく思います。

（宮川）

○博物館（大学を含めて）の全般的な感想（4件）：

「中部大学キャンパスとその博物館を見せてもらえて良かったです。」（パレスチナ）、「博物館で様々な物（もの）を鑑賞できてとても良かったです。大学のキャンパスを見ることも。」（カンボジア）、「中部大学の多くのことに感動しました。」（ケニア）、「研修員たちは記念になった。」（リベリア）

○博物館の内容に係わる感想（6件）：

「博物館には他の国の文化がよく分かる展示がたくさんあった。」（マラウイ）、「博物館を訪れ、私は本当に楽しんで展示を鑑賞することができました。」（エチオピア）、「博物館は、異なる文化の情報を視覚的に得るのにとっても有益であった。」（ジンバブエ）、「私がまだ出会ったことのないものを探究できてとても感動しました。」（ナイジェリア）、「収蔵品は学ぶ人に多くのモチベーションを与えてくれる。」（シエラレオネ）、「展示されていた革に芸術要素の深い洞察力（見識）があった。」（ボツワナ）

○博物館への希望（2件）：

「私が見た物（もの）全てにとっても感動しました。そしていつか私の国の物を博物館に展示してもらいたい。」（モザンビーク）、「北アフリカ、特にモロッコのものより多く展示してもらいたい。」（モロッコ）

「CAAC講義「旅と文学」授業内見学」

会場： 中部大学民族資料博物館 体験実習室

期日： 2019年11月1日（金）

参加： 9人

「CAAC講義「旅と文学」——中部大学民族資料博物館への「たび」

授業担当： 岡本 美和子 CAAC講座「旅と文学」非常勤講師・中部大学非常勤講師

CAAC講義「旅と文学」の皆さんと共に、本学の博物館へ「たび」を始めて4年目になります。今年も岡本聡先生の『おくのほそ道』を引き継ぐ形で、『源氏物語』を読む中で、「源氏物語絵巻（柏木三）」《千村俊二作 現状再現模写 中部大学蔵》を訪ねました。原本の絵巻は徳川美術館で11月23日（土）から12月1日（日）まで公開されました。本学博物館所蔵の《千村俊二作 現状再現模写》は大変貴重なお宝で、それを近々と目の前で鑑賞できることはなんとも幸せなひと時です。本年度からは特別室に公開されるようになり、静かな空間でいつでも見られます。今年も原田千夏子学芸員の解説を受け、現代とは異なる色彩の魅力や絵画の技法等を学びました。遠くシルクロードを経て伝わった文化と日本の文化との融合が、さらに特色ある作品を生み出したことを実感できました。「現代の文化と比べ遜色がないのに驚きです」「その時代の人々の感性に感服いたしました」等の声が聞かれました。館内には他にも遠くアジアの国々からの品々が数多く展示されており、総合的な学習が可能です。

講義で学ぶ皆さんは人生経験豊富で深い理解力を身につけておられます。今から千年前に書かれた源氏物語を読み進むと、その遙かな時空を軽やかに超えてゆかれます。今年絵巻を鑑賞しながら、併せて詞書を朗読しました。平安朝の人々が耳を傾けたように、もの語りを聞きながら絵巻を眺め味わう静謐な時が流れます。本学に博物館あってこそこの体験でした。「立派な資料館を見てびっくり、講義と結びついて、より親しみをもちましたし、知人にも話を広めたい」「私自身、現代手法での物作りの仕事をしておりますので自然を大切に人間の身勝手な行いに、ブレーキをかける一人として生き抜きたいと思います」「専門の学芸員の方の説明を受けることができ良かったです」等の感想が寄せられました。

「旅と文学」の皆さんと見学した折は、2019年秋季企画展 民族資料博物館「学校法人中部大学創立80周年記念 中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今 [初公開] 創立者 三浦幸平先生 肉筆原稿」展が開催されていました。中部大学開学当初の図面も展示され、見るとそこに記された植樹予定の樺が、今は大樹となっ

て博物館の前で豊かな枝を広げているではありませんか！歴史を身近に感じました。（岡本）

「授業見学にむけた体験実習室の活用

——素材研究テーマ：日本の国宝絵画の模写作品紹介」

解説担当： 原田 千夏子

本学の社会人対象のカリキュラムコースのなかで独自の講義を行うCAAC講義のうち、連続して行われる「源氏物語」に関する11月の授業（岡本美和子非常勤講師）において、当館で紹介している《源氏物語絵巻（柏木三）》（中部大学蔵）他の模写作品の解説を行った。

模写作品は、《源氏物語絵巻（柏木三）》の他に、《扇面古写経絵図》、《平治物語絵巻（六波羅御幸）》の計3点と、常設展示室には、《菩薩と天人たち》（パーミヤーン石窟寺院壁画一部模写）がある。現物の作品は、国立博物館の特別企画展で照明を暗く落とした空間で鑑賞することが多いが、こうした優れた模写作品を教育資料として活用することで、至近距離で肉筆の様子を観察することができる。

また、当館において、特別講座の指導講師で日本画家の下川辰彦氏に協力を得て制作した、日本画の天然顔料、染料の重ね塗りの効果を比較して観察するための実験パネルの一部もあわせて紹介した。また日本画の発達とともに日本独自で発展してきた天然の岩絵具の透明感と深みのある美しい色合いを少しでも体験していただければと思います、こうした機会を利用して紹介している。

その他、2019年8月より、館内の体験実習室の利用について、関連書籍コーナーと合わせて、当館の素材研究テーマに関連した収蔵資料を選別し一部を紹介する展示コーナーを設置した。主な内容は次のとおりである。

◇体験実習室にて閲覧できる主な内容（2020年3月現在）

- ・日本の伝統的な絵具について
（国宝絵画の模写作品、顔料・染料の重ね塗り表現効果、研究、色見本パネル）
※愛知県立芸術大学日本画研究室協力
担当 下川 辰彦
（現代教育学部・現 中部大学民族資料博物館外部 専門委員）
- ・染料について（インド更紗の伝統文様、型）
- ・文様について（中国少数民族の民族衣装にみる、吉祥文様）
- ・関連書籍コーナー（博物館活動における関連研究者、企画展の関連書籍等）
- ・シルクロードイマジナリーデータベースの活用
※国立情報学研究所協力

(国立情報学研究所作成のシルクロード関連遺跡の画像と歴史マップの画像)

- ・民族衣装の体験
- ・民族楽器の体験

博物館資料の貸出と活用——

2019年度

- ・2019年度秋季企画展制作動画記録資料（「中部大学 UNIVERSITY GARDENと岡田憲久」展）
[公益財団法人日本科学協会「第12回科学隣接領域研究会」における口頭発表「日本の庭—歴史の継承としてのデザインとは」（岡田憲久氏）]（1月）



体験実習室におけるCAAC講義内の見学の様子

調査・研究業績

以下の記載形式は、本学の『教育・研究活動に関する実態資料』（中部大学教育研究センター）に準じる。

荒屋舗 透

B. 論文＝

1. 「木下柰太郎のスケッチブック（未公開資料・神奈川県近代文学館所蔵）—横浜開港記念史料展覧会・南蛮寺門前・建築家オットー・ヴァーグナーをめぐって—」、中部大学総合学術誌『アリーナ』（ISSN1349-0435, ISBN978-4-8331-4143-7）第22号、中部大学発行、風媒社発売、2019年11月、15-38頁。

C. 口頭研究発表・講演ほか＝

1. 「作庭家、岡田憲久による中部大学の庭」、『中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久』展図録、中部大学民族資料博物館、2019年10月、6-9頁。
2. 「作庭家、岡田憲久氏と語る集い」、『中部大学民族資料博物館 News Letter』16号、中部大学民族資料博物館、2020年1月、1頁。
3. 「中部大学民族資料博物館のアフリカ・コレクション」、一般社団法人アフリカ協会機関紙『アフリカ』、2020年春号、2020年3月、14-17頁。

D. 諸活動＝

1. 公益財団法人ポーラ美術振興財団「専門委員会」、2019年2月
2. 名古屋市美術館「資料収集会議」、2019年2月
3. 『学校法人中部大学創立80周年記念 中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久』展図録、編集・発行：中部大学民族資料博物館（2019年度秋季企画展覧会）、59頁、2019年10月。

前田 富士男

B. 論文＝

1. 「ゲーテの地質学素描から C. G. カールスの地景画へ—スイスのゲーテ、そして『経験の再形成』としての実験」、『形の文化研究2018』12号、形の文化会、2019年3月31日、47-66頁。
2. 「ジェネティック・アーカイヴにおける〈歴史〉の再検証—ポスト・ヒストリカルとポスト・メディウム、そして《江之浦測候所》」、『Booklet27 芸術とアーカイヴ—ジェネティック・エンジン』慶應義塾大学アート・センター、2019年3月31日、8-32頁。

3. 「大学のなかの庭から、庭のなかの大学へ—知の境界を問う〈庭園〉にむけて」、『中部大学 UNIVERSITY GARDEN と岡田憲久—中部大学創立80周年記念』中部大学民族資料博物館、展覧会カタログ、2019年10月1日、44-49頁。

4. 「『ローマ荘』建築家としてのゲーテ—〈物質〉の感性学と大地の解釈学」、『モルフォロギア』41号、ゲーテ自然科学の集い、2019年10月30日、16-31頁。

5. 「前衛としてのグラフィックの〈方位〉—バウハウス創立100周年とヨースト・シュミット」、『学術研究助成紀要』2号、DNP文化振興財団、2019年11月22日、196-208頁。

6. 「ナラティブを超えて、倫理へ—勅使川原三郎ダンス《忘れっぽい天使》」、『月刊シアター x 批評通信』113号、シアター x ・ラボラトリウム演劇研究所、2020年2月、1-2頁。

7. 「音楽と庭園を《展示》するデフォルト—栃木県立美術館「山田耕筰と美術」展とベルリン「地上の悦びの庭」展」、『中部大学民族資料博物館 年報2019』9号、2020年3月、60-63頁。

C. 口頭研究発表・講演ほか＝

1. 「芸術の終焉とバウハウス—〈例外状態〉(C・シュミット)のゆくえ」、形の文化会・桑沢デザイン研究所主催「危機を戦う者たちのバウハウス—創立100周年記念」、桑沢デザイン研究所8階、2019年6月22日。
2. 「バウハウス100年における論争と葛藤—美術史のヒストリオグラフィー(Historiografie)とポスト・ヒストリカルのいま」、三田芸術学会・例会 慶應義塾大学 2020年1月23日。
3. 「自然科学と芸術—1960年と2000年の二つの〈転回〉」、日本科学協会・科学隣接領域研究会第12回「科学と芸術」、日本科学協会・虎ノ門、2020年1月28日。

D. 諸活動＝

1. 形の分科会、会長。形の文化会・桑沢デザイン研究所主催「危機を戦う者たちのバウハウス—創立100周年記念」企画・運営、桑沢デザイン研究所8階、2019年6月22日。
2. ゲーテ自然科学の集い、顧問。
3. DNP（大日本印刷）文化財団、評議員。
4. 慶應義塾大学学術研究支援部、科研申請アドバイスカンファレンス、講師。
5. 科研費助成・基盤研究（C）「グノーシスとモニスムス—ドイツ近代美術の位相」（2018-2020年度）によるドイツ研究調査出張ほか。

原田 千夏子——

B. 論文＝

1. 「中世文化における「橋」のイコノロジー小考」
総合学術誌『アリーナ』第22号、2019年11月19日、
中部大学、323-337頁。
2. 「屏風絵の魅力について」
『2019年度特別講座「古典絵画」受講生作品発表展
記録集——金屏風の小下図制作』、中部大学民族資料
博物館、2020年3月、1-4頁。
3. 活動報告「大学の歴史資料の保存と活用を通じて考
える「大学像」～学校法人中部大学創立80周年記念
催事の記録から」
『中部大学民族資料博物館 年報 2019』9号、2020
年3月、37-45頁。

C. 口頭研究発表・講演ほか＝

1. 解説「『源氏物語絵巻（柏木三）作品解説』」、中部
大学民族資料博物館、CAAC講義内、2019年11月11日。

D. 諸活動——

1. ①企画および解説、印刷物編集「中部大学キャンパ
ス・アートマップ」中部大学、2019年10月。
②企画・展示および解説、図録編集、ホームページ
解説ページ作成編集「2019秋季企画展 学校法
人中部大学創立80周年記念 中部大学
UNIVERSITY GARDENと岡田憲久」展（第一展
示室）、中部大学民族資料博物館、2019年10月14
日～2020年1月14日。
※図録における担当箇所
「3つの庭の概略」13頁。
「中部大学 春日井キャンパスの歴史（建物
と緑化活動）」54-56頁。
「庭をより深く知るための書籍」57頁。
「尾張地域と近郊の主な日本庭園、および書
院建築・数寄屋・露地の関連施設」58-59頁。
③企画・展示および解説、リーフレット編集「2019
秋季企画展 学校法人中部大学創立80周年記念
中部大学 UNIVERSITY GARDENと岡田憲久」
展（第二展示室「春日井キャンパスのはじまりと
今」）、中部大学民族資料博物館、2019年10月14
日～2020年1月14日。
④企画・展示および解説、記録集編集「2019年度
特別講座「古典絵画」受講生作品発表展——金屏
風の小下図制作」
⑤企画、および記録、ホームページ編集「2019年
度特別講座「古典絵画」——金屏風の小下図制作」
⑥企画・展示および解説
「常設展示（アフリカ地域一部改編）」

⑦データベース整備計画

2. 調査 ①中部大学における歴史資料に関する調査、
学校法人中部大学、2019年5月。

大学の歴史資料の保存と活用を通じて考える「大学像」

～学校法人中部大学創立80周年記念催事の記録から

原田 千夏子

はじめに

2019年度、民族資料博物館は、法人創立80周年記念事業の一環として、秋の記念式典にあわせて、春日井キャンパスにおける美術作品を紹介する印刷物の作成をするよう法人事務局長を通じて連絡を受け、その作成にあたった⁽¹⁾。

博物館では、一年前より2019年度の秋季企画展には、春日井キャンパスにおける庭園を紹介する企画展「中部大学 UNIVERSITY GARDENと岡田憲久」展の準備をすでに予定していたため⁽²⁾、これと並行して臨むこととなった。その結果、完成したのが記念印刷物（「中部大学キャンパス・アートマップ」(以下、本文では「アートマップ」と記載)である⁽³⁾。また、これにあわせ、学園全体における大学の歴史に関わる資料の所在について調査することになり、全学へ向けてアンケート調査を実施したところ、様々な情報が寄せられ、多くの協力を得ることができた。ご協力いただいた方々には、この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。

筆者は、これら催事の博物館担当者として携わるなかで、アンケートにおける資料情報の提供者への、直接の

聞き取り調査、および記録撮影にあたったことで、これまで知ることのなかった大学の歴史資料が数多く残されている状況を知った。さらには、その多くが大学資料として、適切な記録を遺していかなければ廃棄の危機に迫られている現状であることを知り、何らかの改善にむけてできる活動はないかと思案している。

また、「アートマップ」、および企画展、特に第二展示室「中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今」の担当として⁽⁴⁾、大学の歴史資料を活用する印刷物や催事を通じて、資料の維持管理面について様々な御意見、御提言を得た。本文において報告し、本学における歴史資料の保存整備への検討が急務である点を訴え、博物館が今後大学のためにできることを考える契機としたい。

以下には、第一章ではアンケート調査結果と問題点をあげる。第二章では、大学の歴史資料の活用事例として、「アートマップ」と企画展におけるコンセプトとその効果について検証する。そして第三章では、問題解決に向け博物館における提案「データベースの応用化」を挙げ、その可能性について触れる。

1. アンケート調査結果と問題点 ～貴重な創設期を伝える資料と課題

1-1 大学創設期の貴重資料

2019年5月、学園全体で実施した大学の歴史資料に関する情報提供への呼びかけに対し、寄せられた情報は、主に次の表のとおりである。どれも大学の創設期以来の活動を伝える貴重な資料ばかりである。だが、その多く

は、かつての関係者等が大学の記念的価値を信じ、守り貫いてきたが、固定的な保存場所を確保できておらず、事情に応じて移動を余儀なくされる事態になっている。

■2019年5月実施のアンケート調査における主な回答事例（概要）

		内容	形状	現状
1	個人	「結晶」第1号校正用原本 創立者の肉筆原稿	冊子、紙	個人蔵
2	個人	名古屋第一工学校卒業アルバム 創立者写真、鶴舞校舎写真	冊子、紙	個人蔵
3	個人	鶴舞校舎関連書類資料	冊子、紙	個人蔵
4	個人	鶴舞校舎改築後の写真	ネガプリント	個人蔵
5	法人	大学開学前の各種申請書類、青焼き図面	冊子	防災書庫

6	個人	大学開学前の測量図面	紙	個人蔵
7	法人	大学開学記念の置時計	個体	移動希望
8	個人	大学開学記念の絵葉書	紙	個人蔵
9	個人	歴代の大学案内（初版1969年他）	紙	個人蔵
10	個人	建築委員会 報告書（1979年当時）	冊子	個人蔵
11	個人	建築図面（原図）（新築、改築棟全て）	紙	個人蔵
12	個人	大学の植栽調査図（平成年間）	紙	個人蔵
13	大学	歴代の測定機器	個体	移動希望
14	大学	歴代の計算機器	個体	移動希望
15	複数部署	海外大学との交流記念品（書、盾等）	個体	一部移動希望
16	大学	絵画	油画（額装）	登録管理不明か

1) 大学開学時の、創立者肉筆原稿（「結晶」第一号の校正原本とその原稿）

創立者による開学時の大学構想への思いが述べられている。（）

2) 4) 鶴舞校舎写真

5) 大学申請時の各種資料（文部省、県への校地取得に関する申請手続き資料の冊子抜粋）

大学開学前の、校地申請のための青焼きの建築設計図面（構想）

農地より転用する際の必要な地質調査、測量結果など複数の資料より、当時の労苦がしのばれる。

7) 8) 大学開学当初の記念品（中部工業短期大学開学記念の置時計、同記念絵葉書）

9) 大学案内1969年（第一号）（キャンパス整備構想のイメージ図掲載を含む）各種原本としての保存部数がほとんどない。

10) キャンパス整備計画委員会で作成された計画書、報告書の資料

1980年代に、高層ビル建築が大学において実施され、建築にともなう周辺の空間（広場）との調和を考えた総合的なキャンパス計画に、当時、学内の教職員と関係者、建設企業担当者との合同による建築委員会の発足によって用いられた資料。現在の大学キャンパスの景観がどのような専門的な見地から検討されていたかを知る貴重資料。

11) 手描きの建築図面（各棟の工期別）

現代ではパソコン機器の発達により手描きで書かれる図面は少ないことから、原図は非常に貴重資料。

13) 工業大学以来の、実験実習に用いてきた、測定機器

（大学の開学から今につながる歴史として、また機器自体の技術発達史の両面からも貴重）

14) 大学のIT化にともない導入が進められてきた、計算機器、タイプライター、パソコン

15) 学部、部署単位で進められてきた、海外交流のなかで作成、また受贈された記念品

1-2 大学の歴史資料に関する実情と問題点

- ・保管場所の不足
- ・情報の統一した記録システムの必要性

本学における機器備品、物品の全体的な管理は、管財部がその主たる担当部署であるため、なかには旧来の資料に関する保存対策についても対応されている。だが、今回のアンケート調査で情報提供があったもののうち、学部や部署において購入管理してきた物品のうち、保管年数がかなり経過し使用しなくなった機器や、記念資料的な物品等は、年数の経過とともに保管場所に窮しているという事情が発生している。しかし、なかには、かつて大学の教育資料として一役を担い、学術的な意味とともに、また大学の歴史を物語る証しとして貴重なものも多数あり、廃棄するには非常にしのびがたく、どの関係者からも、それらの資料の持つ「（二度と手に入れることのできない特別な）時間」に金額に換算することのできない意義と価値を認識し、これまでは廃棄を回避し保管に努められてきたときく。

だが、近年の実情は年々厳しくなっているようである。例えば、建物の改修にともない保管場所として活用

してきた倉庫の移転や担当者の異動、退職によって、資料の散逸や紛失、さらにはやむなく廃棄されている現状があるとき、大変驚いた。また、置き場所に困り、倉庫内に収まらないものについては、廊下の一隅に仮置きせざるをえない機器もある。空調設備のない、夏場には高温に達する倉庫を使用している場合もある。保管場所の確保だけでなく、資料はすでに数十年経過しているものが多く、素材によっては、埃や温湿度に対する適切な対策をとらなければ、劣化の進行が危惧される。

本学では、こうした歴史資料について、一括して整理管理する流れとなっていなかったため、各部署の判断によって保管されている資料はこの他にも存在していると思われる。今後はこれらの資料を整理記録し、適切な保存方法、保管場所について検討し、本学の大学の具体的な歴史を視覚的に系統立てて把握できる場所を設けていく点について検討する時期がきている。

2. 大学の歴史資料の活用事例：「ブランディング」の重要性～「アートマップ」と「展示」におけるコンセプトとその効果

2-1 「アートマップ」と「展示」におけるコンセプト

実物資料の保存対策は、目的は収集のみではなく、今後の大学にとって、資料をいかに活用していくか、という点を並行して考えていくことがより重要ではないかと考えている。「大学のブランド化」とは、「こうでありたい」という「大学像」を作り上げていくことでもある。大学の歴史資料は、そうしたテーマ性に合わせて大学の姿を具体的に紹介できるツール、「かたち」となる。

筆者は、大学の歴史資料の活用事例として、「アートマップ」と秋季企画展の準備過程を通じて、情報発信を効果的に紹介するために、どのような点が必要か、という点を学ぶ機会ともなった。この項目では、今回の工夫点を整理し、今後の活動に活かしたいと思う。

ここでいう「テーマ性」とは、すなわちコンセプトである。準備のはやい段階において、具体的なテーマのイメージを決定する、ということである。

印刷物の作成、また企画展の展示室の配置レイアウトの構想においても、具体的にどの素材をどれくらい、どのように配置したらよいか、様々なアイデアがあるとしても、それらを精査するための視点の軸がなければ、一つの完成形に仕上げることができない。あらかじめコンセプトをもとにしたテーマを明確化しておくことで、選別の段階でコンセプトに常に立ちかえり、取捨選択しまとめあげていく意識をぶれずに保つことができる。担当者には、このような終始一貫した観点が求められる。こ

の姿勢は、あらゆる分野に通じるものであり、「ものづくり」の基本を筆者はあらためて学んだ。

「大学の歴史」を意識していく、という大きな目的はあるものの、そのなかで、より具体的なイメージを定めなければ、内部の詳細となるデザインや画像、掲載内容を選別できずに、仕上がりが散漫となってしまう。それでは、メッセージ性がないまま、観る人に何も伝えることができない。筆者は、「アートマップ」の準備段階で、コンセプトを決めないまま、しばらく画像の選別を行っていたが、膨大な数の画像を前にして、途方にくれたことを思い出す。そのとき、表紙絵のデザイン原案として、関係教員より着想を得たことで、表紙デザインの方向性が明確となり、具体的な制作が順調に進んだことをきっかけに、コンセプトの設定の重要性を知った。関係教員より、「なぜ、この印刷物を作るのか、という印刷物の作成目的を考えていないのではないか」、という指摘を受けたことで、重要な視点が欠けていたと気が付くことができたのだ⁽⁶⁾。以後、「アートマップ」の構成、企画展の展示構成について、両者のコンセプトを関係するよう定め、両者に関連性をもたせてそれぞれに必要な素材、資料を選別して構成した結果、統一的なメッセージを「かたち」にすることができ、より多くの方面から反響を得ることにつながった。「アートマップ」、および「企画展」（第二展示室）の主なコンセプトから構成にいたる過程の概要を次に挙げる。

■「アートマップ」の制作過程

内容：法人創立80周年記念事業の一つとして、本学における文化的要素、特に構内に設置した美術作品を中心に紹介する冊子として作る事となる。

表紙デザイン原案の提案を受ける：

「朝焼けの光を浴びる時計塔」

「なぜこの印刷物を作成するのか、理由を考えよう」

= 「中部大学の未来を希望に託してイメージできるデザインに」記念の年の祝物として、特別感を出すため金銀の色の工夫を検討する。

↓

表紙デザインの原案（着想）が先に定めたことで、デザインのための素材選び、制作がスムーズに着手、進行へ。

↓

表紙デザイン制作：原案をもとに、具体的なデザイン提案が進む。

※デザインイメージ原案があることによる効果

朝日の光の表現、金銀色のデザイン案、時計塔の向き、角度の検討、スクールカラーとの配色の検討など、原案イメージをもとに、複数のデザイン案が出され、より深い打合せを重ねることができた。

↓

表紙イメージが決定したことにより、マップ印刷物全体におけるコンセプトを意識し決定。

コンセプト：「大学の未来に向かい、希望を抱く眼差し」

全体構成において、素材の選別、ページレイアウト、配色の検討など、よりスムーズに進み、結果、全体に統一感が生まれる。そして作品解説のためにも、コンセプトの決定は重要となった。作品情報を、テーマに合わせて各種資料を参考に調べ直し、表現する語句をしばり込み、テーマに相応しい要点を一語で説明するように努めた。

【アートマップの構成】

構内の作品配置図

創立者、建学の精神を象徴するもの（創立者像・書・校歌）

文化施設（メモリアルホール、書院）

大学と交流の深い主要芸術家の紹介

学部別の風景、美術作品のある空間（建物と景観の調和の観点にしばり解説を作成）

四季の風景美

強調したい特色として、郊外型のワンキャンパスという本学の独自の景観美のポイントを一目で伝達できるようにしようと考えた。その象徴が「文化施設」である。大学の発祥、起源を称え、大学開学30周年の時期に建設されたメモリアルホール、工業大学から始まった本学に文化的薫りを加えたいとする願いが込められた書院を含む緑地帯⁽⁶⁾、古建築の移築、復元、自然地形を活かした日本庭園をキャンパスの中央付近に設けるという当時大胆な景観整備活動であったが、今では本学を代表するいずれも地域と大学の交流の場となっている。建物は、総合的な全体整備計画のもとに、また作品設置はその場所を行き交う一人一人の視線の高さを意識し、多視点から大学の景観をきめ細やかに多くの人々がみつめてきた、まさに歴史の作り出した「結晶」といえる。このことを表現するために、共有空間の他に学部ごとの作品のある風景を紹介するページを設けた。

■秋季企画展（第二展示室）「春日井キャンパスのはじまりと今」の制作過程

内容：大学の歴史を紹介する展示

コンセプト：アートマップにおけるコンセプト設定を意識
「大学の未来に向かい、希望を抱く眼差し」
コンセプト：「80周年記念として、開学当初から現在にいたるキャンパス整備の状況がわかる資料紹介」

展示レイアウト：土地の変遷がわかる、主に3つの時代区分で資料を選別

※コンセプトに添ったテーマにより、大学の歴史を新たな区分でみつめ直す。

【第二展示室の構成】

第一章：校地取得と造成、主要な棟の建設 - 未来を見据えた、建物の軸線の統一

(1960年代)

第二章：キャンパス・コア計画 - 建物を相互に組み合わせ、動線を意識した景観作り

(1970年代から1980年代)

第三章：建物と自然地形を活かした緑化環境の整備 - 次代への継承へ向けて

(1990年代以降)

コンセプトを軸に置きながら、そこから素材選びに進む。大学の特色は何か、建学の精神に込められた意味、記念の年ごとに整備されてきた建築と広場、中庭や散策路の効果と用途について、学内外との交流の場が一つ一つ増えていった経緯などを合わせて考えていった。

個々の作品資料の解説には、大西学園長の御著書『学園回想』をもとに⁽⁷⁾、またかつて博物館における印刷物の制作時に以前に行った聞き取り取材の記録を参考に⁽⁸⁾、整備に尽力された当時の人びとの思いを念頭におき、短い文章ゆえに、適切な言葉を吟味し選んだ。

2-2 反響と課題

大学資料の活用事例として、「アートマップ」と「企画展」以外に、紹介方法は、広報印刷物、インターネット、ホームページ、SNSなど多様であるが、実物資料の実際を伝えるには、「展示」は何よりも有効である。事実、今回の2019年度作成の「アートマップ」では、地元新聞でとりあげていただいたところ、地域市民より、実際に散策を希望する声を多数受け、多くの方に手に取っていただいた。大学訪問への関心につながる、新たな地域と大学の交流の始まりとなる期待が高まりつつある。また、同じく2019秋季企画展（第二展示室）「春日

井キャンパスのはじまりと今」では、創立者の肉筆原稿を初公開し、開学当時の大学を作る「情熱」を多くの来館者が感じ取っていたようにうかがうことができ、あらためて実物資料の存在感が持つ観る人に与える「影響力」の大きさを実感した。

つまり、これまで体系的に紹介する「場」がなかったことから、大学のなかで存在すら知られていなかった各種の作品や資料について、テーマを通じて解説を付与して紹介することによって、新たな大学像の一面を周知

し、関心をひくものへとつながったのである。この効果は、ただ単に、印刷物や展示という、「かたち」を媒介し視覚的に認知されたからという単純なものではない。情報発信の「テーマ性」を発信する側から選び、デザイン（展示レイアウト）を創り上げた結果、媒体を通じてメッセージ性が加わり、観る人びとの心情に「共感」できる印象や記憶に残る瞬間が生まれたのだと実感した。次に、今回の企画催事に対する反響の一例として、御意見、御感想の声の概要を挙げる。

アートマップ、秋季企画展における提言、意見（一部抜粋）

		内容
1	一般	他大学では、作品が紛失した事件があったことをふまえ、中部大学では、作品の保存管理を徹底していただければと思います。
2	旧職員	第二展示室の展示内容を期間限定で無くしてしまうのは惜しい。常設することを検討してはどうか。
3	旧職員	書院の防災設備はどうか。沖縄の首里城のように火災にあわないように、万全の設備体制を整える必要があるのではないか。
4	旧職員	書院の木製の橋は、(靖国神社の) 古材の風格があるゆえに周辺の景観との調和が見事に作られていた。なぜ新しい石橋に替えられてしまったのだろうか。作られた当初のコンセプトが継承されていないのではないか。
5	外部機関	企業の歴史を整理する施設を検討中。 歴史資料の展示に参考となった。
6	外部機関	デジタルでは伝えられない、実物資料の持つ力を再認識した。
7	一般	緑豊かなキャンパスの美しさは素晴らしい。建物の構想がこれほど計画的であることにあらためて知った。
8	教職員	ふだん見慣れた景色が、写真の撮影者によってこれほど異なるとは驚きだ。
9	学生	大学のキャンパスについて多くが（展示で）初めて知ることばかり。
10	職員	大学の歴史を知るために、全職員が順に見学すべきではないか。

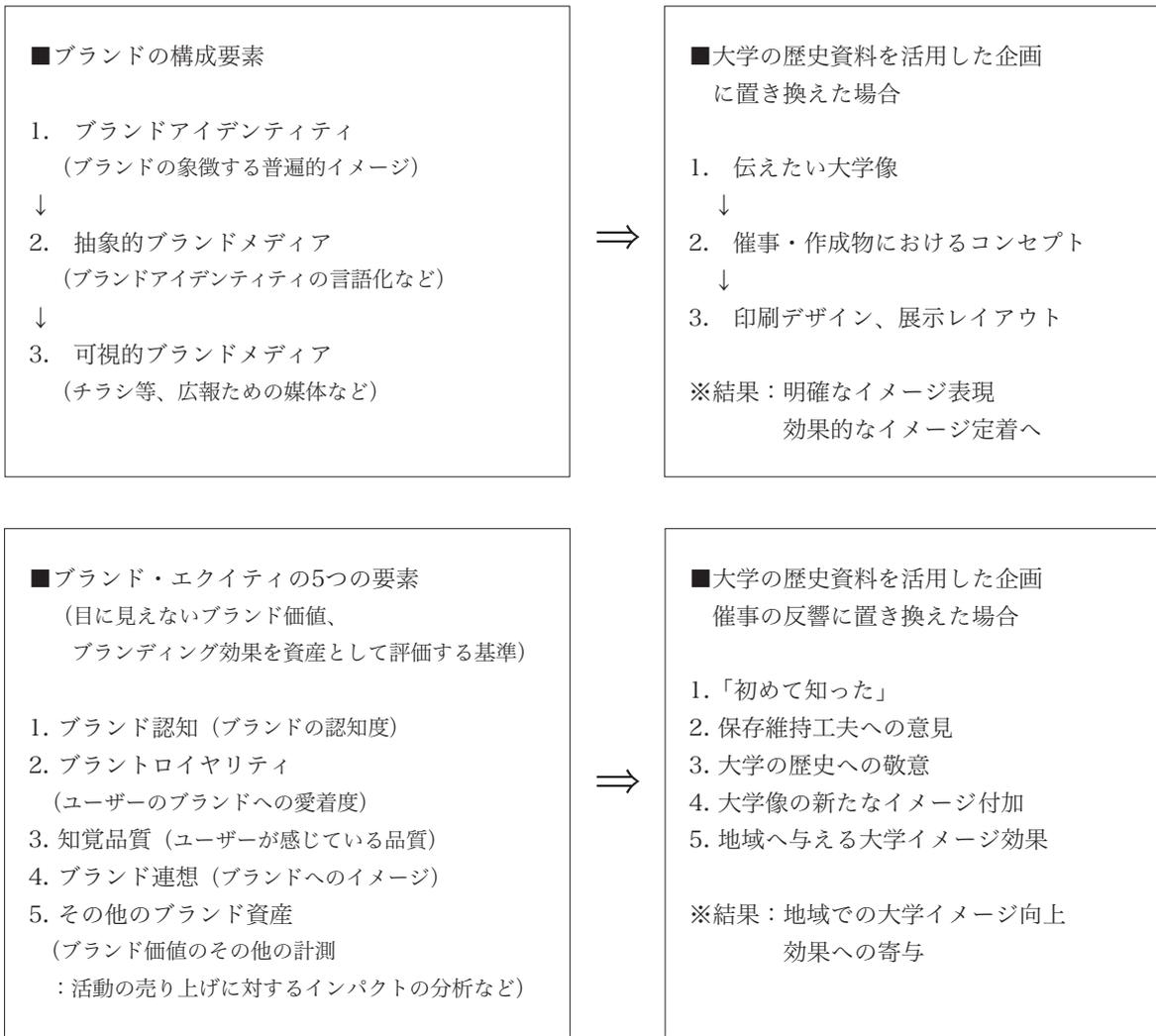
- 1) 「アートマップ」に作品の画像掲載を依頼した作家の先生方より御助言も数多くいただいた。なかでも作品の所在が行方不明となった他校の事例を危惧され、中部大学においては、管理を徹底して作品の紛失を防いでほしいという提言も含まれ、博物館担当者として非常に重く受け止めている。
- 2) このたびの第二展示室の展示は、大学の歴史資料としても大変貴重であり、期間限定で無くしてしまうのは惜しく、なんらかのかたちで常設できないものか、という意見もいただいた。

- 3) 「書院」の火災等の防災対策の現状について質問とともに、改善の必要性について提言を受けた。沖縄の首里城が火災により焼失した記憶が新しい時期であった。施設の維持管理への意識は、個々の保存対策だけでなく、事故災害への総合的で最新の対策方法のための情報を収集するという姿勢を持ち続けることであると気づかされた。それだけ「書院」が多くの関係者が「誇り」「愛着」を抱く重要な存在であることをあらためて実感した。

- 4) 建築と庭園の融合した当初の景観全体のコンセプトをうかがい知る貴重な意見として受け止めた。
- 5) 6) 外部の来場者のなかには、企業の歴史資料の整備を計画される方も見学にお越しいただいた。起業精神の継承を目指す意識とともに、アナログ資料の保存についての課題を検討する傾向は、どの分野においても共通していると見受けられた。
- 7) ~10) 新たな大学の側面について紹介し、その観点での認知を促進した効果としてみる事ができる。

筆者は、その後、別の機会に、マーケティング戦略用語でいう「ブランディング」の考え方をあらためて意識し、企画デザインとの関係性について照らし合わせて考えた際に、今回の企画催事の制作過程で要点となった、コンセプトと造形化の関係性と非常によく類似していると思われた。参考までに、ブランドの構成要素と、さらにブランド

の評価基準とされる要素は次のとおりである⁽⁹⁾。これを、例えば、作りたい印刷物、またはこうでありたい「大学像」に置き換えて作業を順に組み立てていくことは、すべての「ものづくり」に共通した軸となるだろう。本文における主題である、「大学の歴史資料」に人は何を求めているのか、という観点でこれらの意見を観察してみると、「目に見えないものへの価値」の力を再認識し、そのイメージを高めていくところに新たな「ものづくり」が効果に関与できれば、「信頼」と「愛着」を得る大学像の向上の可能性がみえてくるのではないだろうか。2019年度の春に学園関係部署に実施したアンケート調査や、上記掲載の諸意見については、大学の歴史資料を用いて、「大学像」、すなわち「ブランドアイデンティティ」を考えるための「環境分析」の役割になると考え、今後の企画業務にあたる際に意識していきたい。



2-3 作品の保存環境の実情

このように、「大学の歴史資料」が大学像（ブランドイメージ）を考えていく、一つの契機となり得る点について、活用事例を通じて触れてみたが、それゆえに、各資料の保全や補修に対する意識の向上がより一層重要となってくると思われる。

筆者は、「アートマップ」や「企画展図録」および動画資料に使用するため、今夏に専門のカメラマンによる撮影に同行した際に、作品の保存状態の現状をあらためて知る機会にもなった。作品の多くは、建物の扉を開放した空間に設置されるものが多く、外気に常時触れ、天候の変化とともに温湿度の変動する場所に多くが置かれている。意外にも、絵画作品には破損や劣化は目視では確認するものはなかったが、戸外に設置されたブロンズ彫刻に、雨水による汚れと思われる箇所や、絵画の額装に蓄積された埃やクモの巣、樹木の葉などの堆積などが目に付く箇所が複数あり、定期的な清掃の必要性について、担当部署へ報告しその後対応いただいた。その他、表装で覆われていない、画面が直接外気に触れる美術作品については、汚れと劣化が見受けられた事例もあり、これについては今後の課題として残った。

また、秋季企画展においてとりあげた学内の3つの庭園についても、造園設計者自身によって修繕の手が入れられ、亀裂の入ったコンクリート面、石組みや灯笼の入れ替え、老朽化した木製橋の石橋への入れ替え、植栽の手入れ等が行われた。この点は企画展図録に詳細が記載されているので省略する⁽¹⁰⁾。その他、本学ではロタングの塗装の塗り替えや、学内各所の修繕作業、清掃作業が大学催事や記念式典に向け実施された⁽¹¹⁾。美観維持のためには、定期的な観察と補修が必要となることを、法人創立80周年記念事業に対応した各部署があらためて認識を深めたことと思う。これまで以上の定期的なチェックを実施し、情報を共有するシステム体制もより必要となってくると思われる。

3. 貴重資料の保存対策に係る提案 ～データベースの応用的活用と問題点

博物館では2019年度の調査や催事開催以後、各部署から歴史資料についての相談を受ける機会が徐々に増えてきており、なんらかの対策を考案していかなければならない状況を身近に感じている。この本文の最後に、これらの課題に対する一つの提案を述べてみたい。

博物館は、管財部と合同で収蔵資料管理のためのデータベースを2019年度に構築計画を進め、2020年4月より稼働する。データベースの基本は、企業の開発した美術博物館専用のパッケージデータベースで、日本全国の

数多くの県立および市立の博物館が導入している実績があり、特に実物資料を実際に取り扱う学芸員の立場で業務上に必要な仕様項目が盛り込まれていることで定評がある⁽¹²⁾。すなわち、例えば、県立および市立の博物館が扱う多様な分野（絵画彫刻工芸といった美術作品の他、地域の歴史資料としての生活道具、農具、機器、古文書等の文献資料から建物の保存まで）にわたる情報データの整理に効率的に整理でき、わかりやすく情報を共有し、展示や配信方法を工夫するノウハウに期待し、本学の資料整理に活かしたいという目的をもとに選んだ。

もちろん、収蔵資料の特徴は、館に応じて様々であり、実際に整理に用いる分類検索用語は館によって独自に開発していくものとなる。2019年度のデータベース構築作業においては、博物館が管理する民族資料、管財部が管理する美術工芸作品の整理を念頭に、今後は来歴情報をできるだけ追記できるよう、国立博物館の使用事例も参考にしながら、必要な登録項目を検討した。その他、博物館は近年、大学のカメラコレクションの保存管理について移管を受けたので、機器機材に対応できるよう、新たに登録分野を設定する必要がある。そこで、分類用語の大項目には、文系、理系による大きな枠組みを設定し、多様な分野を受入れできるように設定した。さらに、近年では、画像や映像の技術発展が著しいことを念頭に、できるだけ多様な媒体を受け入れることができるよう、紙資料、写真資料、映像録音資料など個別の資料形態のものでも登録できる枠組みを新規で設定した。その結果、大項目の名称は、民族資料と美術工芸作品資料を1)の「文化史」に、機器等を「技術史」に、その他の多様な媒体資料を「メディア」に、といったこの3つにした。これは、文理の両分野を一目で大別でき、かつ分野を持たない、分野をあえて定めない、個々の紙資料、写真資料、映像資料などを直接登録できるようにし、可能な限り幅広く資料を受入れできる応用のきく項目欄を設定した。2020年現在は、管理部署の事務系職員が業務で利用する使用範囲を限定しているが、将来的には、展示室における来館者のための検索用画面への応用、またネットワーク環境を学内全体、さらに学外へという段階を追った環境の拡充を希望している。

そのなかで、管理部署を追加していく仕組みを作ることが可能であれば、大学資料の所在をまず登録することで明らかにし、情報を共有するという点は可能となる。

■博物館・管財部合同データベースの大枠

登録のための分類項目を、あえて大きな分野設定にしている。

大項目のなかに、さらに中項目、小項目を設定し、形状や素材に応じて分類し登録できる仕様となっている。

大項目の名称	内容	対象
文化史	文化系分野の資料	民族資料博物館：民族資料 管財部：美術工芸作品 (将来的には部署を追加可能)
技術史	理系分野の資料	標本、実験機器、その他
メディア	実物資料以外の全資料に対応。文化史、技術史にあえて分類しない、「大学の歴史資料」も該当可。	紙資料、写真資料、映像資料、録音資料など。

■データベースを活用した今後の展望

第一段階

事務系管理業務用：
博物館／管財部

(民族資料＋美術工芸作品)

第二段階

教育・学習用：

- 展示室／学内オープンスペースの作品検索
- HP検索 (学外へ拡充)
- ※中部大学の歴史資料、貴重資料の紹介

現在は、民族資料を中心に管理する博物館と、美術工芸資料を管理する管財部の2つの部署における管理資料を登録し、形状や素材の特徴や来歴を中心に基礎情報を整理してデータ上で文字情報と画像情報を管理することができる。今後の企画展、常設展示の入れ替え、資料の貸出等で所在の変更が発生した場合に、また虫害や劣化に対応する保存整理作業に応じて、資料の状態を観察し記録を追記でき、データに関係者と共有できる内容となっている。博物館は、管財部より管理を移管した機器資料も近年加わったことから、機器の修繕状況を記録し把握する点は一層重要となる。

例えば、ここに管理部署別に登録先を追加していくことによって、大学において共有できる資料情報を登録する環境に通じるのではないかとと思われる。データを登録することによって、形状や素材の特徴や来歴を中心に基礎情報を整理し、実物資料の所在を明らかにする点が第一の目的である。

さらに、情報共有することで、大学広報や博物館における展示等に活用し、資料を公開することができれば、本学の新たな側面として周知していくことにつながり、大学PRに役立てることができると考える。他大学では、

ホームページを通じて、大学所有の歴史資料や学術研究の標本資料をデジタルミュージアムの方法で公開し、遠隔から大学の特色をPRする大学も増えている。大学の特色をわかりやすく打ち出していくために、どのような「大学像」を「ブランディング」していくか、そのような時期を迎えている。データベースを応用した活用は、さらに、地域と大学の新たな交流が生まれるものと期待できるのではないかと考える。

むすびにかえて

現在、博物館へ提供を受けた実物資料の種類は、実験器具、計測機器、撮影機器、写真資料、書類資料などで、博物館における収蔵を希望する意見も複数あった。しかし、博物館の現在の状況では、収蔵庫の容量がすでに限界に達しており、全ての資料の収納を引き受けることが難しい。また、温湿度設定や空調管理を完全に備えた専門の博物館の収蔵庫とは施設の基本的な建築構造が異なるために、取り扱いができる内容も限られる。特に機器については、定期的な補修や点検が必要となる。こうした課題に対して対策を打ち出すために、大学全体におい

て、博物館は他部署と連携をしながら向き合う必要があると思われる。

大学の創設時期を知る先人先輩方が少なくなっていく今こそ、建学の精神に思いを寄せ、常に原点に立ち返ることのできる場が求められている。本学における「大学像」を私たち職員もともにみつめ、共有してイメージを高めることができれば、大学の今後の活動の原動力の一つに欠くことのできない、職員一人ひとりの意識向上につながるのではないか。2019年度の企画催事の記録をもとに、自己への新たな課題を考え始めたところである。

註

- [1] 民族資料博物館の事務組織は、2019年度の組織改編で法人事務局に位置付けられた。
- [2] 2019年秋季企画展図録「学校法人中部大学創立80周年記念 中部大学 UNIVERSITY GARDENと岡田憲久」展、2019年。
(第一展示室)「作庭家、岡田憲久による、中部大学の三つの庭」
(第二展示室)「中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今」
- [3] 「中部大学 キャンパス・アートマップ」、2019年。
- [4] 2019年度 中部大学民族資料博物館 秋季企画展 (第二展示室)「中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今」リーフレット、2019年。
- [5] アートマップの表紙デザイン原案、およびデザイン指導：下川辰彦先生(日本画家、民族資料博物館外部専門委員)。デザイン制作：学校法人中部大学 学園広報部制作課 山崎美穂。
- [6] 筆者作成「尾張地域と近郊の主な日本庭園、および書院建築・数寄屋・露地の関連施設 (企画展図録「中部大学 UNIVERSITY GARDENと岡田憲久」展、2019年、58頁～59頁) 茶事の盛んな東海地域における茶室建築に関連する主な施設において、本学の利休茶室の復元建築は建築史、茶道史において重要な位置づけであると再確認できる。
- [7] 大西良三『学園回想』風媒社、2012年。
- [8] 中部大学民族資料博物館2014年秋季企画展図録「春日井キャンパスの50年」、2014年。
学園長(当時)等に聞き取り取材を行い作成した展示解説パネル(歴代の航空写真に解説文添付)は、展示後に現在の不言実行館のエントランスに常設された。
この他に、当館では、構内設置の美術工芸作品について、学園長(当時)に聞き取り取材を行い、次の印刷物において紹介している。
「中部大学民族資料博物館 公共スペース設置の作品一覧」、2011年。

(2011年愛知県教育委員会提出：「博物館相当施設」指定に係る書類審査資料)

大西学園長コメント「学園探訪」シリーズ第1回「アドリアの爽り」(「中部大学民族資料博物館ニュースレター」5号、2013年)。

大西学園長コメント「学園探訪」シリーズ第2回「ヴェニスのコクリコ」(「中部大学民族資料博物館ニュースレター」6号、2014年)。

大西学園長コメント「学園探訪」シリーズ第4回「人物B」(「中部大学民族資料博物館ニュースレター」8号、2015年)。

大西学園長コメント「学園探訪」シリーズ第5回「逆さの人物」(「中部大学民族資料博物館ニュースレター」9号、2015年)。

- [9] 「ブランディングとは」<https://ferret-plus.com/8503>参照。
細田悦弘『選ばれ続ける会社とは：サステナビリティ時代の企業ブランディング』産業編集センター、2019年、他参照。
- [10] 2019年秋季企画展図録「学校法人中部大学創立80周年記念 中部大学 UNIVERSITY GARDENと岡田憲久」展、2019年。
- [11] (第二展示室)「中部大学 春日井キャンパスのはじまりと今」リーフレット前掲書参照。その他、アートマップの撮影を機に、書院(洞雲亭)内の屏風絵《月下美人》については作者(下川辰彦氏)に補修を依頼し改善することができなかった。
- [12] 民族資料博物館(管財部合同)データベース(2020年4月より稼働・管理業務用)。
分類検索用語等の構成については、2015年より館内の作業部会において関係者等と検討を重ねた内容を参考に作成。

はらだ・ちかこ

(学校法人中部大学 学術支援部学術支援課 / 中部大学民族資料博物館学芸員)

※2020年3月当時

実績 8

出張業務

- 6月19日 愛知県博物館協会総会出席（愛知県芸術文化センター）（稲ヶ部）
- 12月12日 令和元年度愛知県博物館等職員研修会参加（愛知県芸術文化センター）（原田）
- 12月21日 特別企画展における朝日遺跡展示解説への参加（愛知県陶磁美術館）（原田）

実績 9

会議

学芸会議——

- 第1回 2019年4月16日
- 第2回 2019年5月14日
- 第3回 2019年6月12日
- 第4回 2019年7月23日
- 第5回 2019年12月10日
- 第6回 2020年3月17日

運営委員会——

第1回 議事（2019年7月16日）

報告事項

- 1 2019年度 運営委員について
- 2 2018年度 事業活動

審議事項

- 1 2018年度 決算案
- 2 2019年度 予算案
- 3 2019年度 事業活動案
- 4 今後の活動予定案

第2回 議事（2020年3月24日）

報告事項

- 1 2019年度 秋季企画催事
- 2 2019年度 予算執行状況
- 3 2019年度 外部専門委員会
- 4 2019年度 寄贈資料
- 5 2019年度 博物館・管財部合同データベース構築計画
- 6 2019年度 設備・備品の整備

審議事項

- 1 外部専門委員会設置要項の制定
- 2 2020年度 企画催事

外部専門委員会——

第1回 議事（2019年12月10日）

報告事項

- 1 本年度催事計画の経過
- 2 前年度における収蔵資料概要、入館者数、開館日数ほか活動の概況
- 3 本年度予算状況

審議事項

- 1 当館の活動全般評価

2

組織・施設



民族資料博物館 2階入口

組織 1

職員

2020年3月31日現在

館長 荒屋鋪 透
人文学部 教授
学芸員資格保有

専任事務員 稲ヶ部 正幸
学術支援部長

専任事務員 原田 千夏子
学芸員兼務
学芸員資格保有

客員教授 前田 富士男
学芸員資格保有

事務補助員 宮沢 桂子

事務補助員 梶藤 有美

組織 2

運営委員

委員長
荒屋鋪 透 民族資料博物館長・人文学部 教授

委員
國分 泰雄 担当副学長・電子情報工学科 教授

稲川 直樹 工学部建築学科 教授

河内 信幸 国際関係学部国際学科 教授

黄 強 国際関係学部国際学科 教授

中野 智章 国際関係学部国際学科 教授

嘉原 優子 人文学部日本語日本文化学科 教授

デービッド・ローレンス

人文学部英語英米文化学科 准教授

西山 伸一 人文学部 准教授

大橋 岳 人文学部 講師

上野 薫 応用生物学部環境生物科学科 准教授

前田 富士男 中部大学客員 教授

小谷 高秋 法人事務局長・管財部長

稲ヶ部 正幸 学術支援部長

原田 千夏子 学術支援部学術支援課（民族資料博物館担当）（事務局）

組織 3

外部専門委員

委員
川上 實 愛知県立芸術大学名誉教授・元学長

下川 辰彦 画家・日本美術院特待

高橋 晴子 国立民族学博物館

学術資源研究開発センター外来研究員

福山 泰子 龍谷大学国際学部

グローバルスタディーズ学科教授

中部大学民族資料博物館規程

(設置)

第1条 中部大学(以下「本学」という。)における教育、研究及び文化の振興を図るため、中部大学民族資料博物館(以下「博物館」という。)を設置する。

(目的)

第2条 博物館は、本学の教育方針にのっとり、文化的資料、記録、視聴覚教育資料その他必要な資料(以下「博物館資料」という。)を収集、整理、保存、公開して教職員、学生等の利用に供するとともに、展覧会等を通して社会貢献を行うことを目的とする。

(事業)

第3条 博物館は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。

- (1) 博物館資料を収集し、保管し、及び閲覧に供すること。
- (2) 展覧会、講演会等の催しを開催し、及び他のものを行うこれらの催しに協力すること。
- (3) 博物館資料の利用に関し、必要な説明、助言等を行うこと。
- (4) 解説書、調査研究の報告書等を作成すること。
- (5) 他の博物館等と連携し、及び協力すること。
- (6) 地域の教育文化施設が行う文化、文学、美術等芸術に関する活動を援助すること。
- (7) その他博物館の目的を達成するために必要なこと。

(職員)

第4条 博物館に、博物館長、副館長及びその他学芸員など必要な職員を置く。

(博物館運営委員会)

第5条 博物館に、博物館の運営に関する重要事項を審議するため、博物館運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に関する事項は、別に定める。

(利用)

第6条 博物館の利用に関する事項は、別に定める。

(事務)

第7条 博物館に関する事務は、図書館事務部において処理する。

(施行細則)

第8条 この規程に定めるもののほか、博物館の管理及び運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、学長が定める。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成26年4月16日から施行し、平成26年4月1日から適用する。

中部大学民族資料博物館 運営委員会規程

(設置)

第1条 中部大学民族資料博物館規程第5条第2項の規定に基づく、民族資料博物館運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関する事項は、この規程の定めるところによる。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 博物館の運営、整備に関する基本事項
- (2) 博物館の利用方策（地域等への開放を含む。）に関する事項
- (3) 博物館情報システムに関する事項
- (4) その他博物館の運営に関する重要事項

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 副学長のうちから学長が指名する者
- (2) 博物館長
- (3) 副館長
- (4) 学長が指名する者

(任命)

第4条 委員は、学長が任命する。

(任期)

第5条 第3条第4号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じ、学長が欠員を補充する場合の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第6条 運営委員会に委員長を置き、博物館長をもって充てる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

(定足数及び議決数)

第7条 運営委員会は、委員の過半数の出席によって成立し、議事は出席者の過半数で決する。

(審議結果の報告)

第8条 委員長は、運営委員会において決定した重要事

項を中部大学協議会に報告するものとする。

(専門部会)

第9条 運営委員会に、必要に応じて、専門部会を置くことができる。

2 専門部会に関する事項は、別に定める。

(庶務)

第10条 運営委員会の庶務は、図書館事務部において処理する。

(運営細則)

第11条 この規程に定めるもののほか、運営委員会の運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、学長が定める。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成26年4月16日から施行し、平成26年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成29年6月21日から施行し、平成29年4月1日から適用する。

中部大学民族資料博物館

外部専門委員会設置要項

(設置)

第1条 中部大学民族資料博物館（以下「博物館」という。）に、博物館の活動について、学外の有識者から適切な指導・助言及び評価を得るため、中部大学民族資料博物館外部専門委員会（以下「外部専門委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 外部専門委員会は、学外の有識者で組織し、委員は、博物館運営委員会の議を経て、館長が委嘱する。

2 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

3 外部専門委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。

(招集)

第3条 外部専門委員会の開催は、必要に応じて館長が招集する。

(庶務)

第4条 外部専門委員会に関する庶務は、学術支援部学術支援課において処理する。

(その他)

第5条 この要項に定めるもののほか、外部専門委員会について必要な事項は、博物館運営委員会の議を経て、館長が定める。

附 則

1 この要項は、2020年4月1日から施行する。

2 中部大学民族資料博物館外部専門委員会（博物館外部委員会）施行規則（平成24年7月1日制定）は、廃止する。

中部大学民族資料博物館 管理運営細則

(趣旨)

第1条 この細則は、中部大学民族資料博物館規程第8条の規定に基づき、博物館の入館等に関し必要な事項を定めるものとする。

(博物館の開館)

第2条 博物館の開館は、平日の月曜から金曜までの午前9時30分から午後4時30分までとし、入館は閉館の30分前までとする。ただし、大学の定める休日や夏季一斉休暇期間、冬季年末年始の休暇期間は閉館することがある。

(博物館の見学)

第3条 博物館の見学は無料とし、学内外のすべての人が入館することができる。

2 団体による見学を希望する者は、様式1の申請書を提出のうえ、見学の許可を受けるものとする。

(写真撮影及び写真の使用)

第4条 展示室での写真撮影は原則禁止とする。ただし、調査研究のために撮影を希望する者は、様式2の申請書を提出のうえ、撮影許可を受けるものとする。

2 撮影された写真の利用に関しては、次の条件を満たすことを必要とする。

(1) 利用に際しては、中部大学民族資料博物館の所蔵であることを明示すること。

(2) 撮影、借用等によって得られた複製物については、申請書に記載した目的又は方法以外の利用並びに転貸は禁止とする。

(3) 著作権法上の問題が生じた場合は、申請者がその責をすべて負うこととする。

(4) 出版物及びテレビ放映等に利用した場合には、当該出版物を添えて報告すること。

(5) 撮影によって資料を損傷したときは、資料の修復及び再製等に要する経費は申請者が負担する。

(収蔵資料の調査)

第5条 展示室で収蔵資料についての調査を希望する者は、様式3の申請書を提出のうえ、調査の許可を得るものとする。

2 調査を許可する際は、次の条件を付す。

(1) 撮影・借用等によって得られた複製物について、申請書に記載した目的又は方法以外の利用並びに転貸は禁止とする。

(2) 閲覧によって資料を損傷したときは、資料の修復及び再製等に要する経費は申請者が負担する。

(取蔵資料の貸出)

第6条 博物館の取蔵資料の貸出については、別途博物館貸出要綱に基づいて運営するものとする。

(資料の寄贈及び評価)

第7条 博物館資料の寄贈については、別途博物館寄贈資料受入要綱及び資料評価要綱に基づいて運営するものとする。

附 則

この細則は、平成24年4月1日から実施する。

写真撮影申請

(様式2-1)

年 月 日

中部大学民族資料博物館長 殿

申請者
(住 所)
(機関名)
(代表者) 印

資料写真の撮影、掲載について(依頼)

下記のとおり、貴館取蔵資料の写真使用・掲載を申請します。

記

1. 資料名 ()

2. 資料提供の形式 ()
フィルム・デジタルデータ・その他()

3. 掲載出版物・製作物名

4. 掲載書発行予定年月日
年 月 日

5. 担当者氏名・連絡先

6. 備考・補遺

以上

団体見学申請書

(様式1)

年 月 日

中部大学民族資料博物館長 殿

申請者
(住 所)
(団体名)
(代表者) 印

展示室見学について(依頼)

下記のとおり、団体見学の受け入れをお願いいたします。

記

1. 日時 年 月 日()
時 分 ~ 時 分

2. 人数 人
内訳・引率者 人
・小学生未満 人
・小学生(学年) 人
・中学生(学年) 人
・高校生(学年) 人
・学生 人
・大人 人

3. 目的

4. 担当・引率者氏名
連絡先

5. 備考・補遺

以上

資料調査申請書

(様式3)

年 月 日

中部大学民族資料博物館長 殿

申請者
(住 所)
(連絡先)
(氏 名) 印
(所 属)

資料調査願

貴館所蔵の資料を下記のとおり調査させていただきたく、お願い申し上げます。

記

1. 日時

2. 資料(資料名・利用資料点数を明記)

3. 目的

4. 方法(閲覧・撮影・実測など)

5. 備考・補遺

以上

中部大学民族資料博物館寄贈資料受入要綱

(目的)

第1条 この要綱は、博物館の寄贈資料の受け入れに関し必要な事項を定めるものとする。

(条件)

第2条 寄贈資料を受け入れしようとするときは、次の各号の条件に適合するものでなければならない。

- (1) 寄贈資料の受け入れをしようとするときは、学術的かつ研究的に優れたものである場合のほか、高額及び大量の寄贈資料を受ける場合は、民族資料博物館運営委員会の議を経なければならない。ただし、教職員の退職等の際に寄贈を受ける場合は、所属長の推薦を必要とする。
- (2) 寄贈資料は、保存が可能であり維持管理ができるものであること。
- (3) 資料の活用について、寄贈条件が付けられていないものであること。

(評価)

第3条 寄贈資料については、原則として評価を受けなければならない。

(表彰)

第4条 高額な資料の寄贈については、感謝状ないしは表彰をすることができるものとする。

(その他)

第5条 学校法人中部大学固定資産及び物品管理規程の物件に該当する寄贈申し込みがあった場合は、規定に基づき受贈手続きを行う。また、受け入れにあたって工事等が必要となる場合は、事前に管財部と協議するものとする。

附 則

この要綱は、平成24年4月1日から実施する。

資料寄贈申請書	
中部大学民族資料博物館 殿	申請者 住 所 〒 _____ 電 話 (_____) _____ 氏 名 _____ 印
<small>私儀、所蔵する下記資料を寄贈したく、ここに申請します。 寄贈・寄託後の保管・取扱いほかについては、貴館にすべて委任します。</small>	
資料名	
資料分類	民族資料／美術・芸術資料／文化・社会史資料／自然史・技術史資料／画像・音響・データメディア資料／図書・文書資料／その他
資料種別・仕様	
形状・数量	計 点
資料制作者・製作団体	制作者氏名： _____ (_____ 年生— _____ 年没)
制作・製作・成立地・収集地 成立事由	制作地： _____ 事由： _____
資料制作・成立年月	_____ 年 月 日 (頃) < _____ 時代 >
本資料の来歴 1： 取得先・関係機関 取得からの経緯	本資料取得先： 取得から現在までの経緯： _____
取得年月日 取得金額	_____ 年 月 日 (頃) 取得 円 (相当)
本資料の来歴 2： 展示・研究紹介ほか	
寄贈申請理由	
備 考	

※記入欄が不足するときは、別紙に一覧等で作成のうえ資料として添付。

中部大学民族資料博物館収蔵資料貸出要綱

(趣旨)

第1条 この要綱は、博物館の収蔵資料の貸出に関し必要な事項を定めるものとする。

(貸出期間)

第2条 収蔵資料の貸出期間は、原則として2ヶ月以内とする。ただし、博物館長が特に必要と認めた場合には、この貸出期間を変更することができる。

(借用願)

第3条 収蔵資料の貸出を受けようとする者は、様式1による収蔵資料借用願（以下「借用願」という。）を博物館長に提出し、その許可を受けなければならない。ただし、高額及び大量の貸出については、民族資料博物館運営委員会の議を経なければならない。

(貸出の許可)

第4条 博物館長は、借用願の内容を適当と認めた場合は、次の条件を付して貸出を許可することができる。

(1) 貸出を許可した収蔵資料（以下「貸出資料」という。）については、損傷、亡失等のないよう万全の措置を講ずるとともに所要の保険に加入し、不測の事故に備えること。

ただし、博物館長が特に必要でないとして認めた場合は、この限りではない。

(2) 貸出資料を損傷、亡失等した場合には、申請者が弁償の責を負うこと。

(3) 貸出資料を借用の目的以外の用途にあてないこと。

(4) 貸出資料の写真撮影、模写等を行わないこと。ただし、事前に許可を受けた場合は、この限りではない。

(5) 撮影、借用等によって得られた複製物について、申請書に記載した目的又は方法以外の利用並びに転貸は禁止とする。著作権法上の問題が生じた場合は、申請者がその責をすべて負うこと。

(6) 貸出資料をやむを得ない理由により貸出許可期間内に返却できないときは、速やかにその旨を博物館長に報告し、許可を得ること。

(7) 貸出資料の取扱いは、学芸員又はこれと同等の能力を有すると認められた者に行わせ、また、運搬にあたっては美術運搬の専門業者に行わせるものとする。ただし、博物館長が特に必要でないとして認めた場合は、この限りではない。

(借用書)

第5条 借用許可を受けた者は、貸出資料と引き換えに博物館長に様式2による借用書を提出すること。

(貸出時と返却時の確認)

第6条 博物館長は、返却された貸出資料の状態を借用人立会いのもとに写真その他の方法により点検し、原則として様式3による貸出・返却資料確認調書を作成する。

(貸出期間中における返却義務)

第7条 借用人が本要綱に定める条件を履行しないとき、又は大学が貸出資料を必要とするときは、借用人は貸出期間中であっても当該貸出資料の返却を拒むことができない。この場合、借用人に損害が生じてもこれに対する補償を要求することはできない。

(その他)

第8条 高額及び大量な貸出申込があった場合は、貸出資料等を調査し、事前に管財部と協議するものとする。

附 則

この要綱は、平成24年4月1日から実施する。

資料借用申請書

(様式1)	
年 月 日	
中部大学民族資料博物館 殿	
(借用人住所)	印
(借用人氏名)	
収 蔵 資 料 借 用 願	
貴大学の収蔵資料について、下記のとおり借用したいので、よろしくお願ひします。	
記	
借 用 目 的	
借 用 期 間	年 月 日から 年 月 日まで
利 用 場 所	
利 用 方 法	
借 用 資 料 品 名 ()	
資料取扱責任者	

関係法規

中部大学民族資料博物館は2013（平成25年）2月に、愛知県教育委員会から「博物館相当施設」の指定を受け、わが国の「博物館法」に則して活動している。

博物館法

第1章 総則

（この法律の目的）

第1条 この法律は、社会教育法（昭和24年法律第207号）の精神に基き、博物館の設定及び運営に関して必要な事項を定め、その健全な発達を図り、もつて国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的とする。

（定義）

第2条 この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（社会教育法による公民館及び図書館法（昭和25年法律第118号）による図書館を除く。）のうち、地方公共団体、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人（独立行政法人（独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）第2条第1項に規定する独立行政法人をいう。第29条において同じ。）を除く。）が設置するもので次章の規定による登録を受けたものをいう。

2 この法律において、「公立博物館」とは、地方公共団体の設置する博物館をいい、「私立博物館」とは、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は前項の政令で定める法人の設置する博物館をいう。

3 この法律において「博物館資料」とは、博物館が収集し、保管し、又は展示する資料（電磁的記録（電子的方式、磁気的方式その他人の知覚によつては認識することができない方式で作られた記録をいう。）を含む。）をいう。

（博物館の事業）

第3条 博物館は、前条第1項に規定する目的を達成するため、おおむね次に掲げる事業を行う。

一 実物、標本、模写、模型、文献、図表、写真、フィルム、レコード等の博物館資料を豊富に収集し、保管し、及び展示すること。

二 分館を設置し、又は博物館資料を当該博物館外で展示すること。

三 一般公衆に対して、博物館資料の利用に関し必要な説明、助言、指導等を行い、又は研究室、実験室、工作室、図書室等を設置してこれを利用させること。

四 博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。

五 博物館資料の保管及び展示等に関する技術的研究を行うこと。

六 博物館資料に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書等を作成し、及び頒布すること。

七 博物館資料に関する講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助すること。

八 当該博物館の所在地又はその周辺にある文化財保護法（昭和25年法律第214号）の適用を受ける文化財について、解説書又は目録を作成する等一般公衆の当該文化財の利用の便を図ること。

九 社会教育における学習の機会を利用して行つた学習の成果を活用して行う教育活動その他の活動の機会を提供し、及びその提供を奨励すること。

十 他の博物館、博物館と同一の目的を有する国の施設等と緊密に連絡し、協力し、刊行物及び情報の交換、博物館資料の相互貸借等を行うこと。

十一 学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助すること。

2 博物館は、その事業を行うに当つては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。

（館長、学芸員その他の職員）

第4条 博物館に、館長を置く。

2 館長は、館務を掌理し、所属職員を監督して、博物館の任務の達成に努める。

3 博物館に、専門的職員として学芸員を置く。

4 学芸員は、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる。

5 博物館に、館長及び学芸員のほか、学芸員補その他の職員を置くことができる。

6 学芸員補は、学芸員の職務を助ける。

（学芸員の資格）

第5条 次の各号のいずれかに該当する者は、学芸員となる資格を有する。

一 学士の学位を有する者で、大学において文部科学省令で定める博物館に関する科目の単位を修得したもの

二 大学に2年以上在学し、前号の博物館に関する科目

の単位を含めて62単位以上を修得した者で、3年以上学芸員補の職にあつたもの

三 文部科学大臣が、文部科学省令で定めるところにより、前2号に掲げる者と同等以上の学力及び経験を有する者と認めたる

2 前項第2号の学芸員補の職には、官公署、学校又は社会教育施設（博物館の事業に類する事業を行う施設を含む。）における職で、社会教育主事、司書その他の学芸員補の職と同等以上の職として文部科学大臣が指定するものを含むものとする。

（学芸員補の資格）

第6条 学校教育法（昭和22年法律第26号）第90条第1項の規定により大学に入学することのできる者は、学芸員補となる資格を有する。

（学芸員及び学芸員補の研修）

第7条 文部科学大臣及び都道府県の教育委員会は、学芸員及び学芸員補に対し、その資質の向上のために必要な研修を行うよう努めるものとする。

（設置及び運営上望ましい基準）

第8条 文部科学大臣は、博物館の健全な発達を図るために、博物館の設置及び運営上望ましい基準を定め、これを公表するものとする。

（運営の状況に関する評価等）

第9条 博物館は、当該博物館の運営の状況について評価を行うとともに、その結果に基づき博物館の運営の改善を図るため必要な措置を講ずるよう努めなければならない。

（運営の状況に関する情報の提供）

第9条の2 博物館は、当該博物館の事業に関する地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該博物館の運営の状況に関する情報を積極的に提供するよう努めなければならない。

第2章 登録

（登録）

第10条 博物館を設置しようとする者は、当該博物館について、当該博物館の所在する都道府県の教育委員会（当該博物館（都道府県が設置するものを除く。）が指定都市（地方自治法（昭和22年法律第67号）第252条の19第1項の指定都市をいう。以下この条及び第29条において同じ。）の区域内に所在する場合にあつては、当該指定都市の教育委員会。同条を除き、以下同じ。）に備える博物館登録原簿に登録

を受けるものとする。

（登録の申請）

第11条 前条の規定による登録を受けようとする者は、設置しようとする博物館について、左に掲げる事項を記載した登録申請書を都道府県の教育委員会に提出しなければならない。

一 設置者の名称及び私立博物館にあつては設置者の住所

二 名称

三 所在地

2 前項の登録申請書には、次に掲げる書類を添付しなければならない。

一 公立博物館にあつては、設置条例の写し、館則の写し、直接博物館の用に供する建物及び土地の面積を記載した書面及びその図面、当該年度における事業計画書及び予算の歳出の見積りに関する書類、博物館資料の目録並びに館長及び学芸員の氏名を記載した書面

二 私立博物館にあつては、当該法人の定款の写又は当該宗教法人の規則の写し、館則の写し、直接博物館の用に供する建物及び土地の面積を記載した書面及びその図面、当該年度における事業計画書及び収支の見積りに関する書類、博物館資料の目録並びに館長及び学芸員の氏名を記載した書面

（登録要件の審査）

第12条 都道府県の教育委員会は、前条の規定による登録の申請があつた場合においては、当該申請に係る博物館が左に掲げる要件を備えているかどうかを審査し、備えていると認めるときは、同条第1項各号に掲げる事項及び登録の年月日を博物館登録原簿に登録するとともに登録した旨を当該登録申請者に通知し、備えていないと認めるときは、登録しない旨をその理由を附記した書面で当該登録申請者に通知しなければならない。

一 第2条第1項に規定する目的を達成するために必要な博物館資料があること。

二 第2条第1項に規定する目的を達成するために必要な学芸員その他の職員を有すること。

三 第2条第1項に規定する目的を達成するために必要な建物及び土地があること。

四 1年を通じて150日以上開館すること。

（登録事項等の変更）

第13条 博物館の設置者は、第11条第1項各号に掲げる事項について変更があつたとき、又は同条第2項に規定する添付書類の記載事項について重要な変更があつたときは、その旨を都道府県の教育委員会に届け出なければ

ばならない。

2 都道府県の教育委員会は、第11条第1項各号に掲げる事項に変更があつたことを知つたときは、当該博物館に係る登録事項の変更登録をしなければならない。

(登録の取消)

第14条 都道府県の教育委員会は、博物館が第12条各号に掲げる要件を欠くに至つたものと認めるとき、又は虚偽の申請に基いて登録した事実を発見したときは、当該博物館に係る登録を取り消さなければならない。但し、博物館が天災その他やむを得ない事由により要件を欠くに至つた場合においては、その要件を欠くに至つた日から2年間はこの限りでない。

2 都道府県の教育委員会は、前項の規定により登録の取消しをしたときは、当該博物館の設置者に対し、速やかにその旨を通知しなければならない。

(博物館の廃止)

第15条 博物館の設置者は、博物館を廃止したときは、すみやかにその旨を都道府県の教育委員会に届け出なければならない。

2 都道府県の教育委員会は、博物館の設置者が当該博物館を廃止したときは、当該博物館に係る登録をまつ消しなければならない。

(規則への委任)

第16条 この章に定めるものを除くほか、博物館の登録に関し必要な事項は、都道府県の教育委員会の規則で定める。

第17条 削除

第3章 公立博物館

(設置)

第18条 公立博物館の設置に関する事項は、当該博物館を設置する地方公共団体の条例で定めなければならない。

(所管)

第19条 公立博物館は、当該博物館を設置する地方公共団体の教育委員会の所管に属する。

(博物館協議会)

第20条 公立博物館に、博物館協議会を置くことができる。

2 博物館協議会は、博物館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関とする。

第21条 博物館協議会の委員は、当該博物館を設置する地方公共団体の教育委員会が任命する。

第22条 博物館協議会の設置、その委員の任命の基準、定数及び任期その他博物館協議会に関し必要な事項は、

当該博物館を設置する地方公共団体の条例で定めなければならない。この場合において、委員の任命の基準については、文部科学省令で定める基準を参酌するものとする。

(入館料等)

第23条 公立博物館は、入館料その他持物館資料の利用に対する対価を徴取してはならない。但し、博物館の維持運営のためにやむを得ない事情のある場合は、必要な対価を徴取することができる。

(博物館の補助)

第24条 国は、博物館を設置する地方公共団体に対し、予算の範囲内において、博物館の施設、設備に要する経費その他必要な経費の一部を補助することができる。

2 前項の補助金の交付に関し必要な事項は、政令で定める。

第25条 削除

(補助金の交付中止及び補助金の返還)

第26条 国は、博物館を改正する地方公共団体に対し第24条の規定による補助金の交付をした場合において、左の各号の一に該当するときは、当該年度におけるその後の補助金の交付をやめるとともに、第1号の場合の取消が虚偽の申請に基いて登録した事実の発見に因るものである場合には、既に交付した補助金を、第3号及び第4号に該当する場合には、既に交付した当該年度の補助金を返還させなければならない。

一 当該博物館について、第14条の規定による登録の取消があつたとき。

二 地方公共団体が当該博物館を廃止したとき。

三 地方公共団体が補助金の交付の条件に違反したとき。

四 地方公共団体が虚偽の方法で補助金の交付を受けたとき。

第4章 私立博物館

(都道府県の教育委員会との関係)

第27条 都道府県の教育委員会は、博物館に関する指導資料の作成及び調査研究のために、私立博物館に対し必要な報告を求めることができる。

2 都道府県の教育委員会は、私立博物館に対し、その求めに応じて、私立博物館の設置及び運営に関して、専門的、技術的の指導又は助言を与えることができる。

(国及び地方公共団体との関係)

第28条 国及び地方公共団体は、私立博物館に対し、その求めに応じて、必要な物資の確保につき援助を与えることができる。

第5章 雑 則

(博物館に相当する施設)

第29条 博物館の事業に類する事業を行う施設で、国又は独立行政法人が設置する施設にあつては文部科学大臣が、その他の施設にあつては当該施設の所在する都道府県の教育委員会（当該施設（都道府県が設置するものを除く。）が指定都市の区域内に所在する場合にあつては、当該指定都市の教育委員会）が、文部科学省令で定めるところにより、博物館に相当する施設として指定したもののについては、第27条第2項の規定を準用する。

昭和26・12・1法律285号/改正平成26・6・4・法律51号（施行=平成27年4月1日）

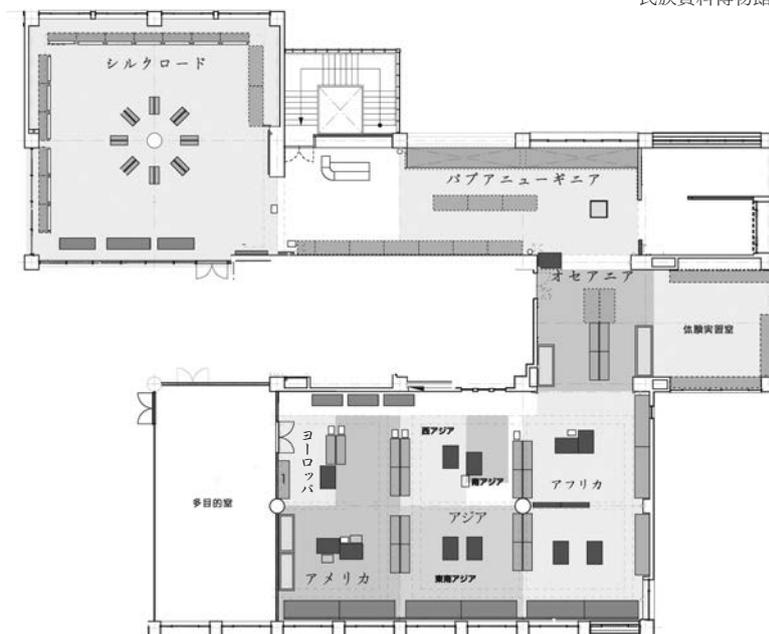
施設 1

施設概要

展示室――	
シルクロード室	171.58㎡
常設展示室	444.77㎡
多目的室	80.20㎡
学習スペース――	
実習室	展示室中約40㎡
自習室（作業室）	39.98㎡
収蔵庫――	
解梱・撮影用前室（収蔵庫1）	53.25㎡
収蔵庫（収蔵庫、収蔵庫3、搬入用経路含）	126.49㎡
事務室――	
事務室	45.72㎡



民族資料博物館 多目的室



展示室平面図

3

研究調査・論文



体験実習室の図書の見学コーナー

音楽と庭園を「展示」するデフォルト ——栃木県立美術館「山田耕筰と美術」展とベルリン「地上の悦びの庭」展

前田 富士男

「芸術は、かつて象徴的な建築に始まり、ギリシア・ローマの古典的な彫刻で発展をとげ、現在のキリスト教近代のロマン的な絵画にいたり、いまや過去のものになりつつある」——哲学者ヘーゲルは、ベルリン大学のいわゆる「美学講義」で、こう述懐した。人間の文化史をめぐる最初の「芸術の終焉」の指摘にほかならない^[1]。

ベルリン大学のすぐ東隣には、パリ・セヌ川のシテ島と同じく、シュプレー川内に大きなシュプレー島があり、まさにその中心に建築家フリードリヒ・シンケルの設計になる《プロイセン王国・国立博物館》(1823-30)の基礎工事が始まっていた。ヘーゲルはこの博物館の基礎工事からの建築すべてをつぶさに日々、眺めていたはずで、あたかもその竣工を見届けたように、1831年、コレラ感染で逝去した。

この博物館は今日、「旧博物館」と呼ばれるように、その後、《新博物館》(1859)や《ボデー博物館》(1904)ほか、多くの博物館・絵画館が建設され、シュプレー島も「博物館島 (Museumsinsel)」と呼ばれるようになった。

いうまでもなくドイツは第二次世界大戦敗戦後、東ドイツ側のドイツ民主共和国 (DDR) と西ドイツ側のドイツ連邦共和国 (BRD) に分断され、とりわけ都市ベルリンは、さらに東西に分断されるという二重の非常事態を余儀なくされた。むろん、1933年からのヒトラー政権下のファシズム体制やホロコーストを想起するまでもなく、これはやむをえない推移だろう。だが、美術史研究者として1976年に、身体検査をへて、初めてベルリン市内の境界を東側に入り、博物館島に歩んだ道筋は忘れがたい。パリやロンドン、ローマ、東京の博物館を知る者として、政治・社会制度と博物館との関連を沈思しつつ、荒れた石畳を踏んだ。

あえて個人的な記憶を記すのは、1990年のドイツ再統合から30年をへたいま、ベルリンに身をおくと、「芸術の終焉のあと」(ダントー)の博物館・美術館の現代的な役割に希望を見いだしもするからだ。ベルリン博物館島北側における博物館群の再整備のための最終作業として、英国の建築家デーヴィッド・チップパーフィールドによる《ジェームズ・ジモン画廊館》が博物館島訪問者情報センターとして2019年に活動を開始した。博物館群では例外にあたる現代建築である。そして、博物館島のウンター・デン・リンデン通りの南に、「フンボルト・

フォーラム (Humboldt Forum)」が本年2020年12月半ばに開館する。ここはかつてのプロイセン国・王宮で、第二次世界大戦中の1945年に破壊され、再統合を機に計画された首都ベルリンの大規模な都市整備の一環として、議事堂の撤去と、王宮建築の現代的な再構築が検討された。長い議論をへて、新しい学術的機能をもつ美術館「フォーラム」の新築が決定した^[2]。

フォーラム全体の活動理念はフンボルト大学美術史学科教授ホルスト・ブレーデカンフほか、多領域の専門家が策定し、新建築はイタリアのフランコ・ステラが担当する。ベルリンの2020年12月、1820年代のヘーゲルの「芸術の終焉」とシンケルの「美術館の始動」から200年間をへて、「芸術の終焉のあと」を見据えた新しい国際文化活動が始まる。

1. 栃木県立美術館「山田耕筰と美術」展

1910 (明治43) 年3月、24歳の作曲家山田耕筰 (1886-1965) は、ベルリンの地を踏んだ。

栃木県立美術館にて本年、2020年1月11日より「山田耕筰と美術」展が開かれた。同館館長ほか関係者全員と、学芸員木村理恵子の長年の努力を反映した優れた展観で、わが国の展覧会史にのこる展示となった。

その240頁の展覧会カタログも、山田耕筰の基本研究として、世界各国の専門図書館と美術館アーカイヴに収蔵され、多くの研究者が頁をひらくだろう。カタログ冒頭に、木村による論文「山田耕筰と美術——出発点としてのベルリン」と、山田耕筰作品カタログ・レゾネの作成や編集など『山田耕筰作品全集』(春秋社、1997)、『山田耕筰著作全集』(岩波書店、2001)で知られ、また評伝著書『山田耕筰——作るのではなく生む』(ミネルヴァ書房、2014)執筆の研究者後藤暢子による論文「日本初代の作曲家 山田耕筰」の2編をおく。巻末には、展示構成に対応する専門研究者、武石みどり・沼辺信一・猿渡紀代子・桑原規子・梅宮弘光・太田丈太郎による充実した論考6篇を収録する。

本展は、概ね6つの展示パートで構成される^[3]。

「1. <Der Sturm 木版画展覧会>と舞踊詩」で、山田のベルリン留学 (1910-1913) と、帰国後の石井漢との交流や「新劇場」ほかでの1920年代までの活動を解明。音楽／舞／詩の領域の接続をテーマとする重要な序章だ (図1)。

ついで「2.『詩と音楽』とその周辺」は、山田が自身の帰国後の挫折からアメリカ留学(1918-1919)を執行し、カーネギーホール公演など成果を取めて帰国し、なおかつベルリン時代からの「総合芸術」への関心を、北原白秋ら詩人とともに制作する歌曲や、画家との共同作業としての楽譜出版などで実践するありようを提示する。ここは、本展のキュレーションの中核をなす展観で、優れた資料の選択と出陳は、観賞者を圧倒する。

「3. 霊楽堂の構想——音楽の法悦境」は、音楽と建築とを演奏会場や劇場ではなく、川喜田煉七郎設計の霊楽堂として把握する解釈学的アプローチとして注目に値しよう。ルドルフ・シュタイナーほか表現主義建築への視線は、展示に明示されずとも、よく理解がおよぶ。他方で、ベルリンは、不思議なことに大音楽家を育てなかった都市ながら、プロイセン・プロテスタントの中心地だったから、その宗教音楽の実践の豊かさは看過しえない。この展示パートは、よく抑制した資料選択が適切だ。それゆえ、たとえば山田がシンケルの建築したベルリンの多くの教会堂・礼拝堂で、いったいどのような宗教音楽体験を重ねたのか——この展示パートで、われわれは宗教と芸術との価値関連をはずかに想う。

展示は「4. 幻のパリ公演とソ連での演奏旅行」へ続く。山田耕筈は1931年春に訪仏し、清元を原作とするオペラ・パレエ《あやめ》の初演をめざしたが、実現をみなかった。しかし、その後のソ連での活躍は、ショスタコーヴィチとの交流をふくめ、めざましい。だが、これもたんに山田の才能の豊かさを紹介する展観ではない。文学・造形芸術・演劇・身体表現といった芸術領域での音楽メディアの機能への問いかけが基本にある。

「5. 舞台の仕事——歌劇・演劇・演奏会」と「6. 日本とドイツのはざままで」は、1933年からの「金曜会」運動や小山内薫との共同作業としての音楽・演劇の一体化、そして1937年の日独共同映画作品《新しき土》から1940年の歌劇作品《夜明け》へと視野をひろげる。

以上に、展覧会の内容をやや詳しく記述した。本展がコロナウィルス感染症対策のために、3月22日の終了をまたずに会期中の3月5日に中止された事態の政府の措置に発言する意図は、ない。また、わが国の博物館法が、教育基本法の社会教育に位置づけられ、大学などの高等教育機関の学術研究・教育と差異化され、学芸員について博物館法の明記する「調査研究」も、地方公務員法や公益法人・学校法人の定款・寄附行為では認知されない状況も多いこともおく。ともかく、わが国の県立・市立・町立などの博物館・美術館は、不整合な法律体系のもとで、活動の規模、運営、予算などに制約が多い。ベルリンの19世紀から現代のフォーラムまで上述したのは、ドイツの運営が、国や自治体、諸財団・機関による複合的な支援のもとで実現している現実を念頭におく



図1



図2

からでもある。

いたずらに、栃木県立美術館の山田耕筈展を、ベルリンにからめて、称揚するわけではない。そうではなく、この県立美術館は、困難な状況下で、つねに研究・調査・展示をより一步を踏み込んで、芸術的感性と社会的公共性との現代的な接続を模索する努力を怠らないからだ。本展に即して、この点をさらに考えてみよう。

2. 展覧会のデフォルトを問う——ダントーをかりて

哲学者アーサー・ダントーは1997年、現代精神の状況を美術館に仮託して、次のように述べた。「芸術がどのようにみえなければならないというアприオリな基準もなく、また美術館の内容すべてが適合しなくてはならないナラティブもない」^[4]。

ヘーゲルによる「芸術の終焉」は、よく知られているように、観念的な歴史観の提示であり、同じベルリン大学の歴史学研究者から強い批判が生じた。実証的な資料批判にもとづいて「そもそも実際に起こった出来事のままに (wie es eigentlich gewesen)」、学術的に歴史を追究すべきだとレオポルト・フォン・ランケは主張し、観念論を批判した。実際、ランケ以降、ベルリン大学は近代的な歴史学の出発点となり、ルネサンス研究で著名なヤーコプ・ブルクハルトや美術史学のハインリヒ・ヴェルフリンなど、スイスほかからベルリンに留学して歴史学を学ぶ者が続いた。

しかしながら、歴史学はつねに複雑な陰影を帯びる学問にほかならない。「実際に起こった出来事のままに」といっても、過去の出来事は、いまは実在しない。歴史学は自然科学の法則追究と原理的に異なり、「解釈学」という方法しか取りえない、との問題である。言い換えれば、歴史研究は、解釈者それぞれの「ナラティブ」に帰着するとの問題相だ。この方法論問題は、1960年代に学術論争となり、人文科学・社会科学領域に「受容史」研究を生む契機となった。

これは方法論上の問題であったが、実際の芸術、とく

に美術領域では、ポップ・アートやアンディ・ウォーホルが登場したために「ポスト・モダン」の端的な現象と理解された。モダンの作品制作が規範とした自律性・独創性・斬新性は、解体され、新たにハイブリッド化・転用性・二次制作化・言説化が規範の代役を担うようになった。この状況は、「芸術の終焉」にほかならない。

さらに、1990年末から21世紀にかけて、この状況は大きく変容する。芸術の存在する場が多文化・相対化し、文化の問題が文化領域の外に移行するからだ。消費社会におけるコミュニケーション・アイテム、行政における観光資産、文化・スポーツの商業化が加速的に拡大してやまない。これが「芸術の終焉のあと」である。上に、引用したダントーの議論は、モダンのアприオリの規範が解体し、さらにポスト・モダンのハイブリッド性・言説性に対応する「ナラティヴ」さえ一層拡大し、「芸術の終焉のあと」の今日を告知する。すなわち、ここでは、ナラティヴの細分化・断片化が生じ、ナラティヴがその支えとした歴史＝物語＝解釈さえも機能不全となる現状、つまり「ポスト・ヒストリカル」の現状である。

ダントーの発言は、いささかラディカルだ。現代の美術館は、芸術的価値に関する近代＝モデルネの規範を括弧にいれてしまう結果、いかなる造形表現も認容するコンテクストを用意し、そして芸術家もそれに同調し、ありとあらゆる表現を展開する、との指摘である。1980年代に「Not Andy Warhol」としてウォーホルの偽作そのものを作品化した盗用の作家マイク・ビドロをあげるまでもない。「芸術の終焉のあと」のいま、もし「Not Mike Bidlo」展を開催するとしたら、そのとき、美術館のキュレーションの基軸はすべて消失する。

基本問題は、すると、「クロノロジー（時系列・編年 Chronologie）」にしかないのか。クロノロジーについてはじつは、あまり学術的議論がすすんでいない。ベルリン大学でランケが学術的な歴史学を要請したとき、それを継承するヨーハン・グスタフ・ドロイゼンは、慎重なクロノロジー論を提示した¹⁵。まずクロノロジーは、実証的な歴史研究の基軸になるとしても、それを一義的に絶対視せず、たえず複数のクロノロジーを想定すべきだという注目すべき発言だ。ナラティヴの根源は、子供を寝かしつける母親の物語りにある。それは科学的時系列でなく、子供の記憶にあって、物理的な「時系列」を覆すような記憶の「編年」として、生き続けるにちがいない。

第二に、芸術体験とは何か、を問うと、その根本は、体験の組み換えにほかならない。芸術にふれたときの高揚感、日常の拘束から自由な精神の戦いは、そのまま時間の組み換えである。なぜなら、芸術作品とは実在する事物に、不在の事物を呼びおこす想像力の時間的推移の出来事以外の何ものでもないからだ。芸術体験とは、不在／実在とのたえざる往復にほかならない。たんなる石

の塊に人間の生命を感じとり、風の音に人工的都市の不安をおぼえたりする。感性と知性、理性は、不思議に交錯する。とくに音楽作品は、物質的な造形芸術作品にはありえない仕方で、実在／不在の時間の織り目をわれわれに突きつける。音楽作品は、一曲のなかでも、あるいは、その制作された時と観賞者が聴く時とでも、時間性の差異が大きく作用するだろう。だから、音楽はクロノロジーをそのままに肯定しない。

第三に、芸術的感性は、多動的で多元的だ。認識論的知性は対象と私とのディスタンスを観察のために前提とし、宗教的实践はそのディスタンスの無化を前提とする。しかし、感性的体験に依拠する芸術的・感性的な触れあいは、その中間の、最重要の触れあいを内触覚 (Haptik) に見いだす。「相即 (コーヘレンツ Kohärenz)」とは、ある庭に坐っていて、眼前に蝶が舞いこむ姿をながめるとき、ふとその蝶に自身を一体化し、ともに庭をちいさく舞うこと、だ。われわれは、ドビュッシーやサティエの音列に、水面や食卓での相即性を体験し、他方でまた、それとは対照的に、文化圏の音響の差異、国際性のありようを感じもする。現代社会での「デフォルト」は、コンピュータ製品の出荷時の初期状態を意味する。本義は、財務活動の用語のようで、実行されているべき債務の不履行状況を意味するようだ。とすれば、人文科学の研究者には魅力的な概念だ。実践されているべき課題がいまだ不履行かもしれない、しかも、現況の初期条件として機能している。この状況は、示唆深い。「山田耕筰と美術」展は、こうしたデフォルトの問題性をことごとく語りかける。本展の傑出した特性にほかならない。

3. 「山田耕筰と美術」展におけるデフォルト

本展の展示は、クロノロジーを重視するけれども、物理的時間の「時系列」を、きわめて入念に、記憶の時間の「編年」に組み換えてゆく。それを可能にするのは「身体」テーマだ。

山田耕筰は1910年3月20日、ベルリンに到着し、3月24日にプロイセン王国ベルリン王立音楽大学の作曲科主任教授マクス・ブルッフの自宅にて、持参した作曲作品の閲覧をふくめ、私的な審査をおおぎ、懇切な推薦状をえた。すぐに行われた大学入学試験で、1911年4月からの夏学期入学生として、50名ちかい受験者のうちから、3名の合格者に選ばれた事実は、後藤暢子の評伝のままに、明記しよう。爾後の山田の国際的な活躍は、ここに始まる。芸術家の国際的活動として、今日まで山田を凌駕する芸術家は存在しないといってよいかもしれない。しかし、本展はこの事実をいたづらに強調しない。

会場には、ベルリンの同時代の芸術を紹介する資料として、1911年の『デア・シュトゥルム』誌を展示するが、すべて舞踊や身体表現の表紙を持つ号である。本展は、山田

の肖像をふくめ、「身体」という、時系列をこえる編年的記憶、それをデフォルトとして設定する卓抜な方法をとる。

第2のデフォルトは、絵画的視覚性の停止である。美術館・博物館は、作品を「しずかに観察する」というデフォルトを遵守してきた。科学的合理性を規範としたカント美学の伝統だが、「芸術の終焉のあと」のいま、このデフォルトは、更新されなければならない。聴覚や触覚、運動感覚を統合する努力が不可欠である。本展では、「詩と音楽」という常套句的提題のパートに、版画家恩地孝四郎や「セノオ楽譜」での竹久夢二ほかとの共同制作として、楽譜作品が80点以上も展示され、圧倒される。会場では多機能型携帯デバイスが使用でき、楽譜ごとに歌曲が聴取できる。すると、これらの楽譜が、たんに装丁に創意をこらす作品ではなく、この楽譜を手にする者が表紙をくって楽譜や歌詞にふれ、歌をうたう行為へと誘われるデザイン作品であることに気づく(図2)。大正・昭和初期への視覚的な懐古ではない。文学と音楽の内的時間を誘起する優れた会場構成である。

第3のデフォルトは、美術館としての能動的な研究・解釈の提示である。未来社から築地小劇場への国内での多様な芸術運動の歴史研究、あるいは舞踊詩と劇音楽という芸術学的問い、芸術の国際性と社会性など、本展では相異なる「コンテクスト」が入念に設定されている。こうしたコンテクストの設定は、わが国における研究アーカイヴの資料研究を的確に踏まえなければ、到底、成立しなかったにちがいない。

さきに2020年12月にベルリンで開館するフンボルト・フォーラムに言及したが、フォーラム(広場)とは、いかに多くの豊かなコンテクストの道筋を「広場」に導くかを指している。本展は、会場での演奏も工夫すれば、まさにベルリンのフォーラムでの開催も可能なほど内容にとむ。

4. ベルリン「地上の喜びの庭」展

庭園は、その作品形式上、展覧会には最も困難な造形芸術作品である。事実、庭園を主題とする展覧会は非常に少ない。この展覧会は、ベルリンのマルティン・グローピウス・バウ美術館で2019年7月26日～12月1日に開催された^[6]。15世紀のヒエロニムス・ボスの作品から現代まで、世界中の22の作家・作品を展示し、とくに現代作品に重点をおき、日本からは草間彌生と篠田太郎の作品が出陳された。本展についてはすでに紹介した経緯もあり、簡単な言及にとどめよう^[7]。

本展の特徴は、インスタレーション作品が多く、展示の視覚性・静止性を打破する姿勢にある。入場者も展示室内で床上に横になって画像を眺めるような仕組みが設けられ、身体的感性をたえず揺り動かす場面が多い(図3)。この小論で述べてきたデフォルトが徹底して作動し

ている展観だが、展示の主題が「ユートピアとディストピア」で、大部な展覧会カタログも、論文とともに、対話体の記述も多く、作品解釈や研究関心が拡散した印象が否めない。とはいえ、あるいは、それゆえ、多元的なコンテクストの提示は、ダントーの指摘する「あらゆる芸術にその正当な居場所を用意する美術館」を具現している。

「山田耕筰と美術展」と「地上の喜びの庭」展は、その角度をやや異にするけれども、現代の美術館の取り組むべきデフォルトのありようをわれわれに語りかけてやまない。



図3

註

- [1] G.W.F.Hegel, *Vorlesungen über die Ästhetik* (Bd.13,14,15), in: Hegel, *Werke in 20 Bänden*, Frankfurt a.M., 1970, Bd.13, S.23ff, Bd.14,S.232ff.
- [2] *Das Berliner Humboldt-Forum, die Wiedergewinnung der Idee*, Peter-Klaus Schuster u. Horst Bredekamp(Hg.), Berlin 2016.
- [3] 『山田耕筰と美術』木村理恵子編、展覧会図録、栃木県立美術館、2020年。
- [4] アーサー・C・ダントー『芸術の終焉のあと——現代芸術と歴史の境界』山田忠彰(監訳)、三元社、2017、29頁(A.C.Danto, *After the end of art, contemporary art and the pale of history*, Princeton UP,1997)。
- [5] 前田富士男「アーカイヴのディルタイとドロイゼン——『歴史考訂学(Historik)』と芸術史、『ディルタイ研究』28号、日本ディルタイ協会、2017年、32-51頁。
- [6] *Garten der Freude*, S. Rosenthal(Hg.), *Ausst.Kat., Berliner Festspiele/Gropius Bau*, Berlin2019.
- [7] 前田富士男「大学のなかの庭から、庭のなかの大学へ——知の境界を問う<庭園>にむけて」、『中部大学 University Gardenと岡田憲久展』展覧会図録、中部大学民族資料博物館、2019年、44-49頁。

図版

1. 『舞踊詩の構想を練る山田耕筰』1914年 [註3]48頁
2. 『セノオヤマダ楽譜1 子供の歌』竹久夢二装丁 1926年 [註3]117頁
3. ピピロッチェ・リスト《ホモ・サピエンス》2005年 [註6] S.319

[付記：本研究は「JSPS科研費JP18K00139」の助成にもとづく]

中部大学民族資料博物館 年報 2019 9号 ©

2020（令和2）年3月31日編集

2020（令和2）年5月31日発行

編集・発行 中部大学民族資料博物館 館長 荒屋鋪 透

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200

TEL 0568-51-9193（直通） FAX 0568-51-9194

<https://www3.chubu.ac.jp/museum/>

ISSN 2434-2491

印刷 不二印刷工業株式会社
